

みんな



<http://www.mintetsu.or.jp/>

特集

祭りと地域コミュニティ

[西日本鉄道が育てる新しい「地縁」のかたち]

坊っちゃんと歩く

石田 千

ぼんやりした朝、停車場まへの喫茶店で、モーニングセットを頼んだ。

窓のむこうに、ちんちん。

みじかい車両が過ぎていった。ああ、のがしちゃった、それじゃあ次まで。声をあげたおじさんは、またどつかり腰をおろし、新聞をひろげていた。

図書館、高校、並木通り。かわいらしい路面電車は、町の時間を、ちんちんとめぐるっている。バスも自転車も、タクシーも乳母車も、おなじ信号で、ぬけがけなしで。ぼくぼく歩いて旅していると、ひとの暮らしと交通は、このくらいがほよい気もしてくる。

どうして好きだか、わからない。はじめて乗ったのは江ノ電で、江の島で

買ってもらった海ほうずきが鳴らなくて、ベソをかけたことを覚えている。

東京にも、早稲田や世田谷のあたりを走っていて、近くにいくと、なんとか乗れないものかしら。路線図をめぐっては、いつまでも子どもみたいと笑ってしまう。

旅先ならばますますで、函館、福井、広島、熊本。走っていたら、乗ってみたい。たいてい一日乗車券を買って、窓から気になったものが見えるたんに降りる。公園や神社、市場、食堂や居酒屋ののれんがはためいていた。すると、ここもその町の風にのって、ばたばた躍る。

松山には、伊予鉄道があった。夕方

の下校電車で、野球部の男の子たちがにぎやかにしていた。ふと思ひ出し、耳をとがらせてみる。

……そりゃイナゴぞな、もし。

いたずら好きな学生さんたちのそんな松山ことばは、もう聞こえなかった。

夏目漱石の『坊っちゃん』は、中学の夏休みに読んだきりだった。記念に読みなおそうと町なかの書店に入ると、文庫本が積んであるのはさすがだった。松山は、漱石の親友、正岡子規の生まれた土地で、いまも俳句が盛んだ。た。駅や商店街では、投句箱を見かけた。それで、車窓をながめるときおり、へたつびな五七五を浮かべてみる。

お城から子規の記念館へ、坊っちゃん



イラスト・岡林玲

みんなの鉄道

CONTENTS

Vol. 55

2015

◎日本民営鉄道協会とは？

昭和42年に社団法人として設立、平成24年4月1日付で一般社団法人に移行、72社の民営鉄道会社で組織されています。
輸送力の増強と安全輸送の確保を促進し、鉄道事業の健全な発達を図り、もって国民経済の発展に寄与することを目的とした活動を行っております。
なお、JR各社や公営地下鉄などは加入していません。

んは天ぶらそばだったけれど、お昼は地元で人気の手打ちうどんにした。愛媛も、うどんの文化圏とのこと。会うひとはものごしやわらかで、うどん好きだからかなあ。

文庫本をひらき、江戸っ子坊っちゃん語り口に、ときどきくすりと笑う。一日乗り降りして日が暮れば、やはり道後温泉につかった。

のぼせた顔で名物の団子を食べていると、愛媛は団子とみかんだけではない、地酒のたいへんよいところですよ。

隣りあわせたおばさんが教えてくれて、だんだん小説のなかのような湯あがりになっていった。

この旅らしい、ときおり思い出して読みかえす。

若いころはただおもしろいと笑っていたけれど、日本人特有の義理人情や、近代化に走る世相への批判も見えてくる。そうして、坊っちゃんのだひとりの味方であったお手伝いの清さんが、この青春小説のとても大切なひとであつたことに気づく。

いしだせん

エッセイスト、小説家。福島県生まれ、東京育ち。國學院大學文学部卒業。2001年『大踏切書店のこと』で第1回古本小説大賞を受賞。2011年『あめりかむら』で2012年『さなりの雲』で芥川賞候補。著書に『きつねの遠足 石田千作文集』『もし笑う』『夜明けのラジオ』など。最新刊に『唄めぐり』がある。

02 四つの季節の鉄道エッセイ 秋 坊っちゃんと歩く

●作家 石田 千

04 基調報告④

福岡・博多の都市形成にみる歴史と風土
●九州大学名誉教授 福岡市博物館館長 有馬 学

特集／祭りと地域コミュニティ

「西日本鉄道が育てる新しい『地縁』のかたち」

TOP INTERVIEW

08 まちに、夢を描こう。

●西日本鉄道株式会社 代表取締役社長 倉富純男

REPORT

12 博多もんは祭り好き 地域の活力は祭りがつくる。

14 博多どんたく

●西日本鉄道株式会社 総務広報部部長 永竿哲哉

●西日本鉄道株式会社 総務広報部広報課課長 三島二郎

●西日本鉄道株式会社 総務広報部庶務課課長 吉田亮

●西鉄どんたく隊 角銅理帆・吉武修平

MY OPTION

柔軟な発想がまちをつくり、夢を描く

●劇団「ギンギラ太陽s」 大塚ムネト

18 博多祇園山笠

●博多祇園山笠振興会会長 豊田侃也

●西日本鉄道株式会社 取締役執行役員 都市開発事業本部本部長 清水信彦

MY OPTION

山笠は、もう一つの人生

●「博多町家」ふるさと館館長 長谷川法世

22 新しい祭り

●西日本鉄道株式会社 西鉄よさこい連 山石有紀美・泉田幸徳・椋野雅大・山口美波

INTERVIEW

24 アジアの交流拠点、国際観光都市 FUKUOKAへ

●福岡市経済観光文化局 観光産業課長 三宅宏治

26 第99回 定時総会を開催

●西日本鉄道株式会社 総務部庶務課課長 吉田亮

28 長野電鉄株式会社

●長野電鉄株式会社 総務部庶務課課長 吉田亮

30 景勝の長崎

●首都大学東京非常勤講師 藤本一美



国際貿易都市として隆盛

福岡市は住みよい街だと言われる。開放的な風土や、人々のいい意味での「軽み」を帯びた気質に起因すると考えられるが、それらは、この地に層となつて折り重なる歴史が醸成してきたものであろう。

弧状をなす日本列島の西の端にあつて、九州北部の玄界灘に面し、ユーラシア大陸と朝鮮半島に近接するこの地は、太古より、大陸の先進的な文化や物品が国内で最初に入ってくる場所であり、人々は対外的な脅威にさらされながらも、経済活動を発展させ、豊かで賑やかな都市を営み続けてきた。

福岡市博物館では、展示によつてこうした福岡市の自画像を描こうと、歴史や文化、考古、民族に関わる資料を収集してきた。それらを介して歴史を遡っていくと、旧石器時代や縄文時代の道具に、朝鮮半島のものとの類似性があり、当時の対外交流の存在を示唆している。

また、弥生時代中期の後半になると、個々に発展していた村々が統合し、各地に「国」が形成されていくが、稲作文化の先進地帯であつた北部九州でひととき大きな勢力を築いていたのが「奴国」である。現存する遺跡や遺物によると、福岡市のルーツとも言える最初の政治的な統合体として確認できるのは、この奴国であつた。

江戸時代後期の天明4（1784）年、金印「漢委奴国王」が志賀島（福岡県東区）で発見された。中国の歴史書『後漢

書』に、西暦57年に後漢の光武帝が「倭奴国」の使者に印綬を与えたという記載があり、それがこの金印と考えられている。奴国をはじめ北部九州の有力な王たちが、朝鮮半島や中国に使者を送り、活発に交流していたことは、市内から出土する中国系の鏡や貨幣などが雄弁に物語っている。頻繁に行き来があり、この時代の福岡はまさに大陸との交渉の表舞台だったのだろう。

古墳時代から奈良、平安時代は「日本」という国家が形づくられていく時代だが、豪族たちがさまざまな大陸との結びつきを築いていた北部九州は、ことさら重要な土地だったと考えられる。

福岡市中央区から遺構が見つかった「鴻臚館」は、7世紀後半から400年の間、世界に向けての日本の顔だった。鴻臚館を拠点に、ヤマト政権としての外交や対外交が行われ、国際交流が積み重ねられていった。

その後、交易拠点は博多に移り、「博多綱首」と呼ばれる博多に居住する宋（中国）人が貿易の担い手となり、博多は国際貿易都市として発展していく。

中世の時代は、現代のわれわれが想像する以上に人々が大陸と頻繁に往来しており、物品だけではなく、新たな時代の宗教や思想も入ってきた。禅宗もその一つであり、日本に禅宗を広め、「禅宗の祖」と呼ばれた栄西は、博多から二度、宋に渡ったが、最初の入宋から帰国して二度目の渡航までの足掛け15年間、博多湾周辺一帯で宗教活動をしている。

鉄道の未来学

基調報告 42

アジアに最も近い都市、福岡。

古来、この地の人々は、大陸との交流を通して豊かな都市を営んできた。積み重ねてきた特色ある歴史と、その歴史の地層に育まれてきた都市の個性。住みよい街との評価が高い福岡の成り立ちを探る。

福岡・博多の都市形成にみる歴史と風土

九州大学名誉教授
福岡市博物館 館長

有馬 学

Manabu ARIMA

鹿児島県出身。1971年東京大学文学部卒業、76年同大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学。九州大学文学部教授、同大学院比較社会文化研究科教授を経て、2009年に停年退職。2012年から福岡市博物館館長。歴史学者、専門は日本近代史。著書に『日本の近代4「国際化」の中の帝国日本』、『日本の歴史23 帝国の昭和』などがある。

取材・構成●茶木 環／撮影●三好邦次

庶民文化の開花

14世紀の南北朝時代以降は、国際貿易都市の博多をめぐって争いが繰り返され、戦国時代、博多は戦乱に巻き込まれ、幾度か焼き打ちにあった。天正15（1587）年、九州平定により、博多の戦国時代に終止符を打った豊臣秀吉は、戦乱で荒廃した街の復興に着手する。後に「太閤町割」と呼ばれる大規模な区画整理で、この街区は現代の福岡の都市構造に通じるところも多い。

福岡の生みの親、黒田孝高（官兵衛）・長政父子は、織田信長や豊臣秀吉、徳川家康といった天下統一を狙う有力な武将の下で活躍した。

長政は、慶長5（1600）年、関ヶ原の戦いの功績で家康から筑前国を与えられて初代福岡藩主となり、7年の歳月をかけて、博多の西隣に福岡城とその城下町を築いた。これにより、新たな武士の町「福岡」と商人の町「博多」、那珂川を境界として新旧の町が共存する双子都市が誕生する。

江戸期の鎖国政策で、国際貿易都市としての役割を無くした博多は、商工業都市として整備され、近世城下町の一部に組み込まれ、二人の町奉行の下、自治が行われた。

参勤交代の制度化や海運業の発展に伴い、各地の産物や文化が福岡と博多に持ち込まれ、庶民の娯楽でもあった祭りや行事も賑やかさを増し、一時期途絶えていた年賀行事の松囃子が再開。筥崎宮放生会も再興され、博多祇園山笠では追い

山が始まり、現在に受け継がれている。

福岡市の誕生

明治4（1871）年、廃藩置県によって福岡県が成立した。その5年後、旧藩単位で設定された県域が再編され、ほぼ現在の県域となった。これに伴い、福岡県庁は福岡城内から「天神」に移転し、天神地区に官公庁街が形成されていく。明治22（1889）年4月1日、市制施行により、現在の中央区の一部と博多区の一部を合わせた福岡市が誕生した。市の名前を「福岡」にするか「博多」にするかで議会は紛糾したが、議長の採決で「福岡市」に決まった。

明治期に入り、変貌を遂げる福岡市ではあったが、当時は必ずしも「九州の中心地」という位置付けではなかった。人口は、江戸時代に国内で唯一の貿易港であった長崎市の方が多かった。旧制の高等教育機関も、明治20（1887）年にナンバースクールの第五高等学校（現・熊本大学）、明治34（1901）年に第七高等学校造士館（現・鹿児島大学）が設立されている。長崎、熊本との誘致合戦の末に明治36（1903）年に京都帝国大学福岡医科大学が福岡に設置され、さらにそれが明治44（1911）年に九州帝国大学（現・九州大学）となったことは、この頃ようやく福岡市が九州の中心都市の位置を占め始めたことを示している。

さらに産業化という点では、現在の北九州市の方が早い。門司港が港湾機能を



拡大して、明治22（1889）年に国の特別輸出港となり、小倉駅は、現在のJR九州の鹿児島本線と日豊本線の結節点であり、交通の要衝となっていた。明治34（1901）年に官営の八幡製鐵所が操業を開始して以降、工場や関連分野の産業が集積し、重化学工業によって栄えていった。新聞社なども小倉を九州の拠点としていた歴史がある。

当時は近代都市イコール工業都市であり、福岡市も博多港を整備して工業都市を目指したが、北九州の諸都市の圧倒的な経済パフォーマンスの前では実現しなかった。

九州随一の都市への飛躍

近代都市として、福岡市の都市集積が本格化したのは、明治期も終わりになってからだ。明治43（1910）年、福岡

県の主催で九州沖縄八県連合の共進会が開催された。これは当時、欧米諸国が行っていた万国博覧会に倣ったイベントで、これを契機に路面電車が開業、道路や橋の整備が一気に進められた。中洲地区に飲食店や劇場などが集まるようになったのも、この頃を端緒としており、現在の天神地区の市街地の基礎は、この会場整備がきっかけとなっている。共進会の終了後は、中央官庁の出先機関や東京・大阪に本社を持つ会社や銀行などの支店の立地につながり、福岡市は「支店経済都市」として発展した。

しかし、福岡市が近代都市として他に比べて群を抜いた存在となったのは、大

正の終わりから昭和初期にかけてである。昭和10（1935）年頃までにデパートのような新しい商業施設が開業し、映画館などの大衆娯楽施設が集積するなど、ちょっとしたモダン都市の様相を呈してくる。

一方、現在のような広域中心都市的なイメージの福岡は、第二次世界大戦後、昭和30年代からの高度経済成長期を背景に、商業集積やメディアの集積などにより形成されたものである。天神地区の開発が進み、昭和40年代から50年代初頭にかけて、商業施設が続々と誕生した。昭和51（1976）年には天神地下街がオープンしたが、地下街の歩行通路に石畳を敷き、外国語のアナウンスを流すというのは、いかにもこの地らしい、新しいものの好きの「軽み」が表れているように思う。

一方の博多地区も、ビジネス街として発展した。昭和50年には山陽新幹線博多駅が開業し、福岡はビジネス・観光両面における九州の中枢都市として、その位置を確立していく。福岡は、日本社会全体が運輸・通信・サービス産業を拡大していく時流にうまく乗って、近代都市としての体裁を整えてきたとも言える。

また、福岡市の市制施行100周年を記念して、平成元（1989）年に埋立地の百道浜で開催された「よかトピア（アジア太平洋博覧会―福岡'89）」の会場跡地は再開発され、ランドマークの福岡タワーや福岡市博物館、福岡ヤフオク！ドームなどが集積する新たな街となり、アジア・太平洋地域の国際交流拠点とな

ることを目指している。

こうした近代の歴史を見ると、福岡市は、歴史は古いが近代的な都市性という意味では新しい地なのである。そして、工業都市にはならず150万都市となった。これは近代都市としては非常に珍しいケースだと言える。

上書き都市・福岡

福岡市は、特に江戸期以前が顕著であるが、豊かな利潤を求めて、頻繁に新興勢力や外国人が出入りし、この地に影響力を持つ政治勢力が交代を繰り返してきた。そうした歴史的な背景がこの地の風土や人々の気質をつくってきたと言える。

古い歴史を持ち、支配者が交代を繰り返してきたという点では京都と似ているが、現在の福岡を見ると、京都と異なっている。福岡には歴史がもたらす重苦しいものがない。重厚長大なものを累積させてこなかった、その身軽さこそがこの地の本質をつくってきたのではないだろうか。

また、長らく対外貿易の中心地として栄えてきたということは、この地が生産の場ではなく、情報の行き交う場であったということを示している。だからこそ、近代において、工業都市としてではなく、商業・情報都市として発展したのだろう。支店経済都市という身軽さも、うまく作用したはずだ。新しさ、面白さが歓迎される。あまり知られてはいないが、ゲーム産業の先駆者の人物を福岡市は多く輩出している。

支店経済という表現は、かつて批判

的・揶揄的に使われていた。しかし今、そのような表現はほとんど使われない。重厚長大なものを持たない福岡市は、それ故に消費を呼び、新たな都市集積を生み出している。では、そのバックグラウンドに歴史的なものは無いかというと、そんなことはない。

こうした福岡市の特性について表す時に、私は最近、「上書き都市・福岡」という言葉を使っている。支配者の交代や時代の流れによって古いものの上に新しいものが造られ、都市は上書きされ、変化、あるいは進化していく。しかし注目すべき点は、コンピューターの上書きと同様に、古いデータは完全に消えて無くなるわけではなく、新たなデータの下層部に残っている点だ。実際に開発の進展に伴う発掘調査で、サルベージされて歴史の古層があらわになったケースが多い。

福岡市営地下鉄建設に伴う発掘調査（昭和52年）をはじめとして、市内の道路の拡幅やビルの建て替えに伴う発掘調査で、弥生時代から近世に及ぶおびただしい遺跡群が発掘されている。ごく最近では、福岡市博物館近辺の西新町遺跡は県立修猷館高等学校の建て替え工事で発見されたものだ。また、福岡城内に建設された平和台球場の改修工事の発掘調査（昭和62年）では、鴻臚館の遺構という超一級の歴史的遺産が発見された。こうしたことから、まさに現代の街が遺跡の上に乘っていることを実感できる。

福岡市の街中では、特にここ40年ほどの間に、パズルのピースを埋めていくかのように、こうしたさまざまな発見や発

掘が続いており、それらを基に考古学者たちがイメージをつないでいる。こうした発見の連鎖によって、瓢箪ひょうたんのような地形の上に立地した中世の博多の都市景観も明らかになってきた。これまで文献資料の中で触れていた歴史が、こうした遺跡や遺物の発見によって、形を伴って徐々に明らかにされてきたことは歴史研究にとって、非常に意義深い。

何より面白いのが、新たな街をつくるための工事、すなわち街を上書きする行為によって、古い歴史がどんな姿を現してくることだ。これは福岡市の歴史が層を成している状態だからこそであり、このような場所は多くはないだろう。

2年前にリニューアルした福岡市博物館の常設展示は、まず金印の実物を見ていただいてその背景を解説し、それから旧石器時代や縄文時代、奴国の時代、鴻臚館ろうりくかんの時代、博多綱首つなうしの時代、博多豪商の時代、福岡藩の時代、近代都市・福岡の時代、そして現代の福岡というカテゴリーで分けている。大きな特徴は、中央政権の所在による時代区分ではなく、この地域独自の価値観に基づく時代区分で展示を見せようとしている点だ。

それぞれの時代ごとの展示は必ずしも壁で囲われていない。特に近代の展示と民族展示は、低い仕切り越しに相互に見通せるようになっていて、過去と現在が相互に行き来する世界であり、現在から透かして過去を見ることができ。ここにも、歴史の古層と上書きという理念がにじみ出ていると言えるのかもしれない。

また、博物館として幸運だったのは、

さまざまな調査による新しい成果が開館に前後して相次いで公開されたことである。一例を挙げれば、昭和50（1975）年に韓国南西部の新安沖で一艘の沈没船が発見され、水中考古学がアジアで最初に話題になった。これは京都の東福寺が派遣した造営料唐船で、博多承天寺の塔頭・釣寂庵ちゅうじやくあんが経営を担い、笠崎宮も関与していたこと、また博多へ向かう途中で難破したことが判明した。この沈没船からは、人名が記載された木簡が多数発見されたが、日本人名ばかりだった。これは貿易の実質的な主導権が中国人から日本人に移っていたことを意味する。まさに物が歴史の事実を示している。そこで、開館時の目玉の一つとして、韓国でレプリカを作ってもらって展示した。こうした発見は開館後も多くあるため、博物館は2年前に一度リニューアルを行い、最新の成果を展示に盛り込んでいる。

福岡市博物館は、よかトピア（アジア太平洋博覧会）のパビリオンとして1年間使用した後に博物館として開館、今年で25周年を迎える。つまり、博物館の歴史は、同じ埋立地に建設された百道浜という街の歴史と重なっている。

今秋には開館記念日を中心に、金印発見の地である志賀島から、金印の現住所である百道浜までの一帯を「金印ロード」と名付け、地域と一体になったイベントを開催したいと考えている。

また、最新の発掘成果を取り入れた特別展「新・奴国展」を10月17日から12月13日まで予定している。

歴史が祭り気質を醸成

福岡市博物館の常設展示の最後は、「福博人生」——現代の福岡に生きる架空の四世代家族を通して、生活習慣や儀礼、地域の人々の生き方や価値観などを説明し、「山笠の世界」すなわち祭りで終わる。

歴史ある商都であり多様な人々と接してきただけに、この地の人たちには他所にはない独特の気質が醸成されてきた。一般的に、「おおらかで陽気、熱中しやすいが飽きやすい、物怖じしないが恥ずかしがり屋」と言われるが、この気性は伝統的でかつ創造的な博多の生活スタイルを生み出した。また、「新しいものの好き」「面白がり」という気質もある。その一方で、義理堅く、近所づきあいを何よりも

大切にする。

福岡市には、博多祇園山笠や博多どんたくなど全国的にも有名な祭りをはじめさまざまな祭りがあるが、祭りが栄えてきたのは、人々の気質によるところが大きい。

こうした人々にとって、山笠は、家族や地域の結束を維持し、伝統を守り、かつ創造し、文化を発信して多くの人を呼び集める仕掛けなのだろう。山笠には都市と地域社会を維持し、再生する力がある。

山笠をはじめとした祭りが存在し、人々の宝として引き継がれているからこそ、福岡市の街は幾層にも成った歴史の上書きを繰り返し、しかし過去を抹殺することなく、今も進化し続けているのだろう。



TOP INTERVIEW

特集：祭りと地域コミュニティ

〔西日本鉄道が育てる新しい「地縁」のかたち〕



まちに、夢を描こう。

道路や橋を整備し、建物をつくり、鉄道を走らせる。
人の流れを創出し、地域の賑わいを育む。
鉄道事業者の歴史は、まちづくりの歴史でもある。
今年、創立 107 年を迎えた西日本鉄道は、地域に根を張り、
地域とともにある成長を目指し、さまざまな「祭り」に参加、
地域との一体感をさらに強固なものへと育てている。
まちづくり企業としての想いを込め、
新たに制定した企業メッセージ「まちに、夢を描こう。」——
西日本鉄道株式会社 倉富純男代表取締役社長にお話を伺った。

西日本鉄道株式会社 代表取締役社長

倉富純男

Sumio KURATOMI

文●茶木 環／撮影●三好邦次

特集：祭りと地域コミュニティ

〔西日本鉄道が育てる新しい「地縁」のかたち〕

祭りもまちづくりも地域を支えること

——福岡・博多には1年を通して数多くの祭りがあります。地元企業として、これらの祭りにはどのように関わっていらっしゃるのですか。

倉富 全国的にも有名なのは「博多どんたく」と「博多祇園山笠」ですが、博多どんたくでは花自動車運行し、パレードには「西鉄どんたく隊」として参加するのが伝統となっています。博多祇園山笠では、平成3年から「ソラリア飾り山笠」を奉納しています。また、全国から約90チームが参加して踊りを競う秋の「ふくこいアジア祭り」には、西鉄グループでチームを結成して参加していますし、北九州市の「わっしょい百万夏まつり」でも花自動車運行し、百万踊りに西鉄チームが参加しています。そのほか「小倉祇園太鼓」や久留米の「一万人のそろばん総踊り」にも、西鉄グループ社員が参加しています。福岡県下全体が事業エリアですから、それぞれのエリアで参加して、地元の皆さまと一緒に祭りを盛り上げています。

——企業が祭りの協賛金やロジスティクスの提供を行うケースは多々ありますが、交通事業者が直接参加するのは珍しいのではないのでしょうか。

倉富 大手民鉄の中でも、当社の地域への関わり方には、特異なところがあると思います。それは福岡市の地域事情でもあります。交通事業者は当社とJR、市営地下鉄の3社局で、民鉄と

して地域に根差して公共交通を担ってきたのは当社だけであるというのが大きいと思います。地域との関係性が強く、濃い。祭りも当然、協賛するだけではなく、地域と一緒に自分たちがつくってきたという自負があり、これからの支えていこうという決意があります。

私は、まちづくりと祭りは基本的には同じだと考えているんです。当社が拠点とする天神地区をはじめ西鉄沿線のまちづくりでは、私たちが土台となつて、時に押ししたり、引っ張ったりしながらその役割を果たしていきます。祭りも、担ぎ上げられるのではなく、私たちが担ぎ上げる役割を果たす。これが西鉄と地域との関わり方であり、祭りへの関わり方なのだと思います。

——博多どんたくの「西鉄どんたく隊」は、主に新入社員をメンバーに結成されると伺っています。

倉富 懐かしい話ですが、私も入社した年にパレードに参加しました。踊りが下手だったので、台車を押す係でしたが（笑）。例外はありますが、新入社員は原則参加するというのが当社の伝統です。

西鉄グループの企業理念は「『出逢いをつくり、期待をはこぶ』事業を通して、『あんしん』と『かいてき』と『ときめき』を提供しつづけ、地域とともに歩み、ともに発展します」ですが、新入社員にはパレードに参加し、地域の皆さまと一緒に汗をかくことで、この理念を身をもって体験しても

らいたいと願っています。

毎年、打ち上げの席で新入社員に話すのですが「西鉄は電車やバス、まちづくりで地域を支えていくことを目指している。君たちがパレードでかぶり物をした電車やバスは、社員である君たちが支えている。今日、沿道の方々喜んでいただいたように、君たち自身がお客さまに喜んでもらえる存在になつてほしい」と言っています。

博多どんたくのパレードは、社会の入り口に立ったばかりの新入社員が「地域の中の自分」を肌で感じ取ることができる非常にいい機会なんです。若い彼らの力が、地域の祭りを支えることにもなるので、今後も続けていきたいと思っています。

——パレードでは、社長ご自身も先頭に立つて行進されています。

倉富 当社は、縁の下で地域を支える公共交通事業者ですから、表に出て脚光を浴びるというのは、本来のわれわれのポジションではありません。だから面はゆいんですが、ごくまれな晴れの場になっている（笑）。会社のPRにもなりますし、何より私自身、立場を超えて若い人たちと一緒に行進し、汗を流すのが楽しい。若い人たちに元気をもらっています。

新たな企業メッセージを発信

——『みんなつ』23号（平成19年）では、天神地区のまちづくりについてお話を伺いました。

倉富 当時は、天神地区におけるエリアマネジメントの先駆けの時代でした。平成13年にグループの横断組織「天神委員会」を設置して天神地区の活性化を図る努力を続け、平成18年に発足した民間企業、団体、行政や市民から成るエリアマネジメント組織「We Love天神協議会」と連携を取りながらまちの発展に取り組んでいます。こ



約2年の歳月をかけて大規模改装を実施、九州No.1のファッションビルとして平成27年4月25日にグランドオープンを迎えたソラリアプラザ。

のまちづくりの大きな枠組みの中で、当社の交通事業や都市開発事業は「地域を一緒に支えていく」ことを土台として、活動を行ってきました。そういう意味でも、祭りは、当社の各事業の根本と通じ合うものがあるんです。

——継続して、まちづくりのムーブメントを牽引していらっしゃるんですね。

倉富 エリアマネジメントを一体的・効果的に推進していくための指針として、We Love 天神協議会が平成20年に発表した「天神のまちづくりガイドライン」の「10の戦略」に従って、まちの価値を高める活動を続けています。祭りやイベントは、戦略の中の「毎日がフェスティバル戦略」に含まれるものですし、「まちの新陳代謝戦略」や「ふさわしく絵になる戦略」に従って、当社の西鉄福岡（天神）駅に直結するソラリアプラザを大改装し、平成27年4月25日にグランドオープンを迎えました。併せて、天神高速バスターミナルも同年3月21日にリニューアルオープンしています。まちづくりの戦略がここに来て、ようやく形になってきました。

また、天神地区には建設されて40、50年が経過したビルが多いのですが、現在、再開発計画が進められています。国家戦略特区に指定されたことを受け、福岡市が進めている「天神ビッグバン」プロジェクトで、新たな空間と雇用の創出を目指し、今後10年で約30棟の建て替えが行われる予定です。

——そうした中、西鉄は昨年、新しい

企業メッセージを発表されました。

倉富 西鉄沿線にはさまざまなまちがあり、そこで暮らす方々、鉄道やバス、商業施設などグループ事業のお客さま、西鉄グループ社員など、多くの人があります。一人ひとりの、皆の、夢や未来を企業理念に沿って実現していく。そんな想いを込めて、新しい企業メッセージ「まちに、夢を描こう。」を制定しました。このメッセージには当社の「積極的に事業を展開する」基本方針と、「まちに夢を描く」「悩んだら、夢を描く方を選ぶ」行動指針を込めており、さらに「私たちは夢を描いていきます」という地域への宣言であり、約束でもあります。

——どの部署、どの業務にも当てはまり、社員のやる気を鼓舞しますね。

倉富 昨年の9月22日、創立記念日に制定したのですが、グループ内の各社、各部門で、大小にかかわらず、それぞれ夢を前面に押し出して前向きに事業を展開しましょう、あるいは長期ビジョンを描いてくださいと、全社を挙げて取り組んでいるところです。

この1年、私も「表に出る人も裏方の人も、さまざまな形でまちの発展に貢献している」という意識を常に持とう。裏方の立場から誰かの夢を支えることも夢の一つとなる」と、繰り返し社員に話をしてきました。地味な仕事でも、誇りをもって取り組む。例えば、お客さまにお茶をお出しするのも、心を込めることによって、企業メッセージを伝えることができる。す

べての業務が一翼を担っていると思います。

——新しい企業メッセージは、どのような経緯でつくられることになったのですか。

倉富 当社は毎年、企業イメージ調査を実施しているのですが、その結果を見てみると、私たちの持ち味や取り組みが、お客さまにお客さまに伝わっていないように感じました。そこでまず、自分たちが取り組んでいること、前向きな企業であることや社員が常に明るく仕事に取り組んでいるという事実をきちんと伝えていこう。それを自分たちの行動指針にして、お客さまに明快に伝えていこうと考え、企業メッセージを変更することにしました。

平成5年から発信していた企業メッセージは「人へ、社会へ、あしたへ動く」というものでしたが、新しい企業メッセージは、もっと具体的で、分かりやすい、伝わりやすいものを目指しました。社内横断組織でブランドづくりに取り組んでいるブランド委員会というチームがあり、その委員会が中心となつて議論を重ね、国内外の従業員から何度もヒアリングを行って決まったのが「まちに、夢を描こう。」です。海外にも従業員が2000人ほどいるので、彼らに意見を聞くと、自分たちが伝えたい気持ちは「Connecting Your Dreams」であると。直訳すると



平成 25 年の博多祇園山笠・集団山見せでは、台上がりを務めた。

ではこのフレーズで発信するようにしました。

いずれも自分たちがやりたいこと、伝えたいことを発信できるメッセージを目指して、社員が議論してつくったので、非常に分かりやすい企業メッセージになったと思います。今では、社員も口々に「まちに、夢を描こう。」と発信していますし、私自身も海外の会議での発言や挨拶では、いつも「Connecting Your Dreams」で締めくくっています。

全員参加型で積極的に取り組む

——福岡市の公共交通の担い手として

は、観光客が増加する中、どのような対策を取られていますか。

倉富 国の政策もあり、特にインバウンドの伸びは目覚ましいものがあります。まちを歩いていても外国語が飛び交って、活気がある。福岡市がインバウンド対策に本気で取り組んでいることが大きいのではないのでしょうか。

「We Love天神協議会」でも、インバウンド対策を拡大しています。

4カ国語表示も当たり前になってきていますし、西鉄福岡（天神）駅が入るターミナルビルには、観光案内所や両替所など国内外の観光客にとって必要な施設を集めています。天神地区における周遊観光の拠点づくりや免税店の設置など、行政も応援してくれてお



平成 27 年の「西鉄どんたく隊」のテーマは「まちに、夢を描こう。」

速輸送システム」に福岡市と協働で取り組んでいます。平成 28 年より連絡バスの導入を開始し、平成 32 年までには約 10 分間隔での本格運行を目指しており、インバウンドを含め増加する都心部の交通需要に適切に対応していきます。

—— 祭りも福岡の大きな観光資源ですが、国内外の観光客数の増加で、さらに人気が高まっているのではないのでしょうか。

倉富 それはありますね。もともとこの地は大陸に向いているので、昔から海外の方を受け入れる風土があります。福岡・博多の人々は基本的にウエルカム精神で、「一緒に楽しもう」「一緒に頑張ろう」という意識が強い。そ

れが、インバウンドを受け入れる意識につながっているんですね。

そういう風土、土地柄が祭りそのものにも活かれています。博多どんたくなどは、海外の方々も大勢パレードに参加されていますし、伝統行事である博多祇園山笠にも地元以外の方々が参加されている。ウエルカムな福岡の祭りは、さらに大きな集客資源となると思います。

—— 西鉄も非常にオープンにさまざまなものを受け入れ、次々と新たな取り組みを展開されています。

倉富 新しいものはなんでも取り入れる土地柄ですし、社内でも、とにかく全員参加型で取り組んでいます。開放性をもって、受け入れるべきものは受け入れ、至らない所は改めます。

創業以来、当社の行動指針は一貫していて、107 年間、まちに夢を描き続けてきました。改めてそれを確認して、分かりやすく表したのが、今度の企業メッセージです。このメッセージは私どもがこれまで積み重ねてきた歴史そのものなんです。

先輩たちがまちに夢を描いて、天神地区に電車を走らせ、都市形成を手掛けてきたように、私たちも安全という土台の上に、夢を描いて、交通や不動産、流通な



どさまざまな事業で、まちづくりを引き継ぎ、発展させていきます。まさに「オッシヨイオッシヨイ」と祭りの気概をもって、事業に取り組んでいるんです。現状維持のままで退縮はしません。「じっとしているわけにはいかん」という感じですね。社員も皆、理解を深めてくれて、新しい企画がたくさん出てきています。

—— 最後に今後の抱負をお伺いしたいと思います。

倉富 これからも天神地区をはじめ沿線が明るいまちであり続けていくこと、西鉄グループ全体をさらに活力ある企業風土にして、一層明るく、そして誇りが持てる会社に成長させることが私の目標です。

まちに夢を描くことを各社、各部門が積み重ねていくことが、グループの誇りになり、ブランドになる。グループ一丸となって、日々、それを行いな

くる。

福岡・博多には博多どんたく港まつりと博多祇園山笠、二つの大きな祭りがある。
この二つの祭りだけで、500万人の観客を動員する福岡・博多は「祭りのまち」だ。
毎月、何がしかの伝統ある祭り、新しい賑やかな祭りが開催されている。
祭りは「人」であり、地域の「文化」だと言われる。
祭りを通して、地域コミュニティのあらゆる世代の交流が生まれ、
祭りの力が、地域の文化を深め、人を呼び、さらに発展させていく。
いま、少子高齢化という人口減少社会へ向かう中、
多くのまちが、地域コミュニティの維持・発展の在りようを模索している。
地域とともに在るために——祭りに参加し、祭りを牽引することで、
「地縁」をつくり育む、西日本鉄道の取り組みをレポートする。

文◎茶木 環／撮影◎三好邦次



7月



●博多祇園山笠 櫛田神社(福岡市博多区、旧博多部一帯) 7月1日～15日

●1日 夕 当番町お汐井とり
当番町が箱崎浜までお汐井(真砂)を取りに行く。

●9日 夕 全流お汐井とり
全流が箱崎浜までお汐井を取りに行く。

●10日 夕 流昇き
それぞれの流の区域内を昇き回る。

●11日 早朝 朝山
祝儀山とも呼ばれ、長く町に貢献した功労者が台上がりする。
夕 他流昇き
ほかの流の区域に出て昇き回る。

●12日 午後3時59分 追い山ならし
3日後に迫った「追い山」のリハーサル。

●13日 午後3時30分 集団山見せ
昇き山笠が那珂川を渡って福岡部を走るのはこのときだけ。

●14日 夕 流昇き
追い山に向けての最後の練習。

●15日 午前4時59分 追い山
一番山笠から順に櫛田入りする。櫛田入りにかかる時間とゴールの廻り止めまでにかかる時間を、それぞれ競う。

写真上: 集団山見せ 中: 全流お汐井とり 下: 十三番山笠ソラリア

9月 ●放生会 筥崎宮 9月12日～18日

仏教の殺生戒(せつしょうかい)に基づき、鳥や魚を自然に帰す放生神事が行われる。博多三大祭りの一つで、参道には数百軒の露店が並ぶ。



(写真提供: 福岡市)

●神幸式大祭 太宰府天満宮 9月20～25日

菅原道真公の御神徳を仰ぎ、五穀豊穡を神明に感謝する大祭。

●MUSIC CITY TENJIN

天神など都心部一帯 9月中

天神各所に特設ステージが設置され、プロ・アマ問わず多くのアーティストが出演する。すべての会場で入場は無料となっている。

●アジアンパーティ 福岡市内各所 9月～10月

「アジア太平洋フェスティバル福岡」「アジアフォーカス・福岡国際映画祭」「福岡アジア文化賞授賞式」など「アジアと創る」をコンセプトに、期間中、福岡市内各所で多彩なイベントを展開。

10月 ●中洲まつり 博多中洲一帯 10月第1木曜日～土曜日

500人の女性がみこしをかつぐ「國廣(くにひろ)女みこし」、「はしご酒大会」などを開催。

●ふくこいアジア祭り

福岡市内各所 10月～11月

●博多おくんち 櫛田神社 10月23日～24日

約1200年前から伝わる秋の実りに感謝する大祭。牛車に曳かれるみこしを先頭に、稚児行列や獅子頭などの「御神幸」、踊り隊やプラスバンドなどが櫛田神社を出発して博多のまちを一巡する。

11月 ●大相撲九州場所 福岡国際センター 11月第2土曜日の翌日の日曜日から15日間

●天神のクリスマスへ行こう(クリスマスイルミネーション)

福岡市内各所 11月中旬～12月下旬

12月 ●福岡国際マラソン 平和台陸上競技場～香椎(折り返し) 12月第1日曜日

●年越厄除大祭 若八幡宮 大晦日

新暦と旧暦の大晦日に行われる。厄払いの神社として有名で「厄八幡」の愛称で親しまれている。

「博多もんは祭り好き」 地域の活力は祭りがつ

福岡市と近郊の主な年間行事

1月 ●玉取祭（玉せせり）^{はこぎせり} 筥崎宮 1月3日
江戸時代に始まった正月行事。締め込み姿の氏子たちが江戸側と陸側に分かれ、玉を競って1年間の吉凶を占う。

●鶯替え・鬼すべ ^{うす} 太宰府天満宮 1月7日
「鶯替え」は木彫りの鶯を交換して1年間の幸福を祈念する神事。「鬼すべ」はその年の災難消除や開運招福を願って行われる火除け神事。

●十日恵比須正月大祭 十日恵比須神社
1月8日～11日
商売繁盛、五穀豊穡を祈る正月の大祭。

2月 ●節分大祭 櫛田神社・東長寺ほか 2月3日

3月 ●曲水の宴 ^{まぎくすい} 太宰府天満宮 3月第1日曜日
平安時代の宮中行事を今に再現する禊祓（みそぎはらえ）の神事。

●おおほりまつり
福岡城跡（舞鶴公園）3月下旬
福岡藩初代藩主の黒田長政と家臣24騎に扮した「黒田二十五騎」、少年武者・稚児が練り歩く。

4月 ●福岡城さくらまつり
福岡城跡（舞鶴公園）3月下旬～4月上旬

7月 ●小倉祇園太鼓
小倉城周辺（北九州市小倉北区）7月1日～19日
山車の前後に載せた太鼓を若衆が威勢よく打ち鳴らし、町中が勇壮な太鼓の音で覆われる。340余年の歴史を誇る小倉の夏祭り。

●戸畑祇園大山笠
北九州市戸畑区 7月第4土曜日を挟む3日間
博多祇園山笠、小倉祇園太鼓とともに福岡県夏の三大祭りの一つ。昼の幟山笠が夜になると提灯で彩られた「光のピラミッド」に姿を変える。

8月 ●西日本大濠花火大会 ^{おおほり} 大濠公園 8月1日

●わっしょい百万夏まつり
小倉城周辺（北九州市小倉北区）8月第1土曜日・日曜日
昭和63年、市政25周年を機に誕生した市民参加型の祭り。現在では期間中、約300団体・2万人余りが参加し、150万人を超える見物客が訪れる。

●水の祭典久留米まつり
久留米市六ツ門町周辺 8月上旬
久留米市民あげての夏祭り。パレードや1万人のそろばん総踊り、太鼓響演会、花火大会などさまざまな催しを実施される。



●博多どんたく港まつり
福岡市内各所 5月3日～4日

●3日 午後1時頃～パレード

●4日 午後3時頃～パレード
午後6時頃～総踊り



写真上：パレードに参加する西鉄どんたく隊
中・左：地元保育園児を招いてのにしてつ花自動車点灯式
中・右：西鉄どんたく隊の合同練習風景
下：福岡ヤフオク！ドーム内を走行するにしてつ花自動車



博多どんたく

春のGW期間中、全国でもトップクラスの人出で賑わう「博多どんたく」は、新年を祝う行事を起源とするだけに、賑やかで華々しい。地元企業である西鉄は、「縁の下」と「表舞台」、両方からこの祭りを支え、地域を盛り上げている。

あらゆる場面で祭りに深く関わる

全国的にも知名度が高い「博多どんたく」は、830余年の歴史を持つ「博多松囃子」（国選択無形民俗文化財）が源流とされる。福祿寿・恵比須・大黒天の三福神と稚児から成る松囃子が時の権力者のもとへ年賀の祝いに回る行事で、江戸期になると、洒落つきの多い博多町人が趣向を凝らした出で立ちや出し物で松囃子の後に続いて回った。これが「通りもん」で、三福神・稚児・通りもんが、現在の博多どんたくの原型となっている。また、明治期からオランダ語の「ゾンターク（休日）」を語源に、「どんたく」と呼ばれるようになった。

戦時中は中断されていたが、終戦の翌年、人々は戦災を免れたところから三味線や太鼓を借り集めて瓦礫の町を練り歩き、昭和22年には博多どんたくが開催された。その後は、年に一度の無礼講の行事として年々盛んになり、昭和37年から市民総参加の「福岡市民の祭り『博多どんたく港まつり』」となっている。

現在、博多どんたく港まつりは、毎年



西日本鉄道株式会社
総務広報部 部長

永竿哲哉
Tetsuya NAGASAO

5月3日と4日に開催。有志の集まりや学校、企業などの各種団体による「どんたく隊」と呼ばれるグループがパレードに参加し、演舞を披露する。約3万人が思い思いの衣装で行進し、国内外から200万人以上の観客が訪れる全国でも有数の規模の祭りに発展した。

この博多どんたくに毎年、西鉄もグループを挙げて参加している。企業は通常、地域の祭りに対して、協賛や後援という立場に立つことが多いが、福岡・博多の祭りに対する西鉄のスタンスは、それとは大きく異なっているようだ。積極的に参加し、祭りそのものに深く関与して、ともに祭りを盛り立てている。

永竿哲哉総務広報部長は、「外から見ると不思議に思われるかもしれないが、われわれにとって特別なことではなく、地域に根差している企業であれば当たり

特集：祭りと地域コミュニティ

〔西日本鉄道が育てる新しい「地縁」のかたち〕

前という感覚」だと語る。
西鉄グループの社員も毎年、「西鉄どんたく隊」を結成して、パレードに参加する。倉富純男社長を先頭に、新入社員、社員有志、グループ内の学校法人の



「西鉄どんたく隊」メンバー

左／角銅理帆さん（西日本鉄道株式会社 自動車事業本部 業務課 業務課）

右／吉武修平さん（株式会社西日本アカウンティングサービス アカウンティング事業部 西鉄担当）



1

1 博多松離子の三福神。馬にまたがり、各所を祝い回る（提供：福岡市）。2 総勢200人の西鉄どんたく隊。3 新天町の演舞台では三味線演奏を披露。



2



3

学生、それに地元の劇団「ギンギラ太陽's」や九州産業高校のプラスバンドなどが加わったメンバー総勢約200人で福岡・博多の街を練り歩く。
総務広報部の吉田亮庶務課長の説明に

よれば、「タオルやバンダナ、Tシャツなど、毎年、オリジナルのものをづくり、共通のアイテムを着けて一体感を高めている。また、ギンギラ太陽'sの皆さんだけではなく、新入社員を中心に約50人が、西鉄の電車やバス、ビルのかぶり物を付けて行進する」という、まさに現代の通りもんスタイル。今年は企業メッセージの「まちに、夢を描こう。」を集団で表現し、後日発表されるどんたく隊賞人気コンクールでは、アイデア賞に当たる「西島伊三雄賞」を受賞した。

今年、初参加した新入社員の角銅理帆さんは「最初はかぶり物に抵抗があったが、私たちが通ると、沿道の方々が手を振ってくださった。自分の会社がとても親しまれているんだと実感できて嬉しかった」と言い、吉武修平さんは「自分の会社が地域と深くつながっていることが分かった。会社と地域の発展を目指して、少しでも役に立ちたいという思いが強まった」と語る。

普段はまちづくりの黒子的な役割で業務に励む社員たちだが、華々しいパレードへの参加は、市民の自社への期待を受け止める格好の機会となったようだ。

博多どんたくが盛り上がる要素としてはもう一つ、「演舞台」の存在が大きい。市内30数カ所に設置される演舞台では、どんたく隊や飛び入り参加の市民が歌や踊りを披露する。西鉄も、西鉄福岡（天神）駅と直結した商業施設・ソラリアプラザ内に「天神ソ

ラリア演舞台」を設置している。

さらに注目したいのが、個々の社員の地域との強いつながりだ。一例を挙げると、西鉄がまちづくりを進めてきた天神地区内の新天町商店街は戦後復興期から「新天町どんたく隊」を結成してパレードに参加しており、演舞台では伝統的な三味線演奏を披露している。ここに毎年、西鉄社員も加わり、一緒に行進して、演舞台でも演奏を行っている。企業体としてだけではなく、個人レベルでも地元で溶け込み、地縁を育んでいると言えるだろう。

名物として定着した花自動車

また、西鉄では交通事業者である特性を活かし、「にしてつ花自動車」を運行。そのきらびやかな姿は博多どんたくの名物として定着し、人気を博している。

かつて、この役割を担ったのは路面電車にさまざまな装飾が施された「花電車」で、明治期から祝事で運行されていた。

「昭和24年から博多どんたくでも運行されるようになった。祭りの風物詩として、毎年楽しみにしてくださる方が多



西日本鉄道株式会社
総務広報部 広報課 課長

三島二郎
Jiro MISHIMA



1昭和22年運行の戦後初の花電車「富士山」。2昭和25年運行の花電車「祝商工祭」。3今年も6台の花自動車が運行。44月末に行われた西鉄どんたく隊の合同練習。振り付けなどを最終確認する。5パレード出発直前まで繰り返し練習するメンバー。

かったようだ」と総務広報部の三島二郎
広報課長は解説する。

路面電車の廃止で、福岡市民に愛され
た花電車は昭和50年に休止されたが、花
電車を懐かしむ声に应运て、2年後に

「花自動車」として復活した。

現在、運行する花自動車は6台。地元
のスポーツチームや童話、アニメなどを
テーマに装飾。1台当りに使用される
電球は約1200個、造花は1万個とい

うきらびやかさだ。

市民から愛される花自動車は博多どん
たくの日程前後も活躍している。4月には
地元保育園児を招待しての点灯式、
「福岡ソフトバンクホークスVS埼玉西武
ライオンズ（どんたく博多デー201
5）」の一戦では、福岡ヤフオクド
ーム内を走行した。

市内走行は5月2日から4日までの3
日間。博多どんたくのパレードでは、助
手席に子どもたちを乗せて運行し、子ど
もの日には遊園地「かいしかえんシルバ
ニアガーデン」に展示、記念撮影する親
子連れで賑わった。

ちなみに、花自動車のハンドルを握る
ことができるのは、グループ内から選抜
された優秀な運転士。花自動車を担当す
るのはとても名誉なことで、達成感を感
じる業務だという。

開放的な風土が祭りを発展させる

参加者も観客も高揚し、まさに街中が
賑わう博多どんたくだが、福岡・博多の
おほかで開放的な風土が祭りをさらに
特長あるものになっているようだ。パレ



西日本鉄道株式会社
総務広報部 庶務課 課長

吉田 亮
Ryo YOSHIDA

ドには「新潟市どんたく隊」
や「マレーシアどんたく隊」
など国内外からも参加、国境
や宗教色もない自由奔放なパ
レードが進む。祭りの最後
は、各演舞台を中心に市内各
所で行われる総踊りで締める
が、観客も飛び入りで参加で
きる。そして全員で、夜が更

けても熱気が冷めやらずに、「もう一回」
と何度も踊りが繰り返されるそう。

「江戸時代には商人の町・博多と城下
町・福岡を分断する石垣で隔てられてい
たが、正月年賀の松囃子の時だけ、博多
町人は福岡の町に入ることができた」と
永竿部長が言うように、祭りのたびに地
域内外の人々がさまざまな壁を取り払
い、熱く交流を深めてきたのかもしれな
い。

「人が集まることで、当社の電車やバ
ス、あるいは商業施設の利用者が増える
ことも有り難いが、福岡・博多の街の勢
いを持続させることが重要。祭りに対す
るわれわれの姿勢は、まちづくりに取り
組む当社の企業姿勢に通じる」と永竿部
長は語る。

市民総参加と言われる賑わいの最中、
表舞台に立たずとも、混雑する街中の交
通整理をはじめ、駅や商業ビルなど関連
施設で汗を流す西鉄の社員が大勢いる。
さまざまな形で「自分たちのまちの祭
り」を実直に支える企業や人が存在する
ことによって、博多どんたくは伝統と今
日性が共生する都市の祭りとして発展し
てきたのだろう。

柔軟な発想が まちをつくり、夢を描く

MY OPINION

ギンギラ太陽's は、天神地区の交通、流通など業界事情を徹底取材し、地元密着の舞台を展開している。あらゆるものを擬人化したユニークなかぶり物で表現される作品には、西鉄の電車やバス、ビルが登場する。このまちの物語を編み出してきた立場から、西鉄という企業についてお話しいただいた。

劇団「ギンギラ太陽's」

大塚ムネト

Muneto OTSUKA

博多どんたくではかぶり物と一緒にパレード

僕らの劇団はすべて実名で脚本を制作しています。活動を開始してまだ1年目に、かぶり物をして西鉄バスを題材にした作品を上演して西鉄の本社から電話がかかってきた時には、「あ、見つかった。もう終わりだ」と思いました（笑）。すると意外なことに「面白いから一緒にイベントをやろう」とおっしゃった。西鉄が、地元企業では初めて、僕らを表玄関から入れてくれたんです。その懐の深さ、柔軟な発想に感動しました。

博多どんたくもそうです。「かぶり物をして皆でやろう」。西鉄どんたく隊の社員もかぶり物をする提案されて、正直、驚きましたが、嬉しかったですね。何よりお客さんが喜んでくれることをとても大切にしているんだなと思いました。以来12年間、西鉄の皆さんと一緒に参加しています。

この街に生き、街を語り続ける

僕は新人時代、この福岡で表現者として生きていきたいという思いを抱えながら、10年の間、もがき続けていました。そんな時、ふと街を見ると、ちょうど天神地区の第2次流通戦争の頃で、どんどん新しいビルができて、まさに街が動いていた。「これは面白い」と思って、天神の街を題材にした芝居をつくりました。『天神開拓史』という、福岡大空襲を背景にいに天神の街ができていったかという物語です。

劇中ではビルも乗り物も擬人化して、喜怒哀楽を表現します。観客は劇場を出ると、直前に自分が感動したり泣いたりしたものが目の前にある。劇場に入る前には見えていなかったかもしれない景色が見える。そんな演劇が西鉄をはじめ地元の皆さんに受け入れられ、面白がっていただいて、僕らは現在も活動ができています。表現者として、この街で生かしてもらっている。だからこそ、この街の物語をしっかりと語り続けることが僕らの使命だと思っています。

全国ツアーにも出ますが、他の都市に行くと初めて、福岡からこの表現活動が許されているんだと実感しました。自由なイメージがある札幌や仙台、東京や大阪でさえも実名で上演していることに驚かれます。「博多は芸どころ」という言葉もあ

り、才能がある人も多いのですが、自分ではやらなくても芸事を面白がる気質の人々がいて、アーティストを支え、育ててくれる環境があるからこそ、芸事が花開くのだと思います。

僕らのホームグラウンドは西鉄ホールで、ホール完成時には『天神開拓史』で地元のこけら落としをさせてもらいました。以来、最新エピソードを付け加えながら、節目ごとに上演しています。

西鉄が一からこの街をつくってきた

天神の歴史をひもとくと、約100年前、田んぼしかなかったこの街に、渡辺與八郎が私財を投じて道路（渡辺通り）をつくり、真ん中に軌道を敷いて、西鉄の前身のひとつである博多電気軌道をつくった。もう一人の立役者は電力の鬼と呼ばれた松永安左衛門で、西鉄の前身・福岡電気軌道をつくります。そして松永安左衛門の盟友、日本初のターミナル百貨店・阪急百貨店で成功した小林一三がサポートして、九州初のターミナル百貨店ができた。それらが今の天神につながっている。まちに夢を描いて、この街の基礎をつくったわけです。フロンティア精神を持った人々が出会うべくして出会いながら、街ができていく。この街の成り立ちはそこが面白いんです。さらに言えば、渡辺與八郎はアジア進出を構想に入れていた。これも現代の福岡市につながりますよね。

そんな風に地元住民の視点から西鉄を見ると、西鉄は一からこの街をつくってきた。だから博多どんたくにしても、街の祭りにただ参加しているのではなくて、自分たちがつくってきたまちの祭りを自分たちで盛り上げるのは当然という感覚なのではないでしょうか。

西鉄の「まちに、夢を描こう。」という新しい企業メッセージには、僕は「まちづくりルネッサンス」のようなものを感じ

ています。「お、また何かが始まるのか!」と胸をときめかせ、このまちの「これから」をとても楽しみにしています。



Profile

福岡を拠点とし、九州で最大の動員力を誇る演劇集団「ギンギラ太陽's」を主宰。劇作家・演出家・役者・造形師。地元密着にこだわり、流通や交通などの業界を徹底取材し、史実ありきの物語として作品化している。



博多祇園山笠

770年以上もの間、引き継がれてきた福岡・博多の伝統行事「博多祇園山笠」は時代に即した変化を取り入れながら、興隆を極めてきた。このまちの発展の根幹には、人々の拠り所となる祭りの存在が大きい。

勇壮な昇き山笠と
華麗な飾り山笠

博多どんたくが終わっても、福岡・博多の人々の熱気は冷めやらない。翌月からは「博多祇園山笠」の本格的な準備が始まる。そして、この祭りで福岡・博多の夏は幕を開ける。

博多祇園山笠は、博多の総鎮守である櫛田神社の祇園大祭に際して、この地域の人々が夏の疫病封じを願う奉納神事であり、国の重要無形民俗文化財に指定されている。毎年7月1日から15日まで、半月にわたってさまざまな行事が執り行われ、期間中には約300万人が祭りの見物に福岡・博多を訪れる。

770年以上も続くこの伝統行事には地域が積み重ねてきた歴史が息づいている。象徴的なのはその運営システムだ。豊臣秀吉による「太閤町割り」で十数カ町連合の自治組織「流」が再編しながら現在も生きており、「昇き山笠」「飾り山笠」を運営する。

博多祇園山笠振興会の豊田侃也会長は、「昇き山笠は非常に勇壮で、飾り山笠には優美さがある」と語る。

「ご神体である昇き山笠は「大黒流」「東



博多祇園山笠振興会 会長

豊田侃也

Kanya TOYODA

流」「中洲流」「西流」「千代流」「恵比須流」「土居流」の七つの流が運営する。昇き山笠の大きさは高さ4.5m、重量が1t。台回りにいる昇き手が交代で担い、後押しの力で前に進む。

「山には棒が6本あり、位置によって高さが異なるので、身長差があっても誰でも山笠台につける。また、右肩・左肩と利き手で担う。これが先人の知恵であり、昇き山笠の魅力」と豊田会長は話す。

祭りの後半、それぞれの流域を昇いで清める10日の流昇きから山笠が動き始め、12日の追い山ならし、13日の集団山見せでは七流が揃って勇姿を見せる。山笠のクライマックス、15日の追い山では、七流の昇き山笠が5kmの行程の速さを競って、払暁の博多のまちを疾走する。

対する「飾り山笠」は福岡市内14カ所に建てられ、7月1日から一斉に公開され

特集：祭りと地域コミュニティ

〔西日本鉄道が育てる新しい「地縁」のかたち〕

る。高さ十数mにも及ぶ豪華絢爛な飾り山笠は、流が運営する山笠のほか、商店街や企業が独自に建てるものもある。「博多祇園山笠はもともと博多の祭りだったが、近年は地域外の商店街や、西鉄や福岡ヤフオク！ドームなどの企業が

飾り山笠を建てるようになり、祭りのエリアが広がった。今では福岡市の祭りとも言える」（豊田会長）
西鉄が拠点とする天神地区では、昭和24年に「新天町」が博多のエリア外で初めて飾り山笠を建て、平成3年には西鉄



■博多祇園山笠のクライマックス、15日の追い山。山笠の参加者で道が埋め尽くされる。■子を抱き、孫の手を引き、山笠と走る。■13日の集団山見せ。昇き山笠と昇き手に勢水（きおいみず）がかけられる。

が中心となる「ソラリア」が加わり、平成17年からは「天神一丁目」も建てている。福岡市内の中でも、飾り山笠が集積する地区となっている。
山笠は、毎年、新しく作り直すのが特徴だ。それだけ費用的負担も大きいのだが、それでも「山笠のためなら惜しまない」伝統がある。
「福岡の文化を醸成する取り組みの一環として参加することが決まった」（永竿部長）という飾り山笠「ソラリア」は、ソラリアプラザ1階のイベントスペース・ゼファに建てられる。飾り物は、博多人形師の置鮎正弘氏、小嶋慎二氏が制作。今年の飾り山笠の表題は、表が「風雲桶狭間」、見送り（背面）が「筑紫曙千三百五十年」だった。
ソラリア飾り山笠の題材は、西鉄沿線の歴史ロマンを取り上げることが多い。例えば、これまでに古代中国の秦の時代に不老不死の薬を求めて来日した徐福伝説や福岡藩を治めた黒田家まつわるものなどを選んでいるが、平成17年の飾り山笠には、西鉄らしいこんなエピソードがある。
「この年に起きた福岡県西方沖地震では、福岡市西区の玄界島で住宅の半数が全壊する被害が出た。復興支援の気持ちを含め、玄海島に伝わる百合若伝説をテーマに飾り山笠を建てた」（永竿部長）



西日本鉄道株式会社 取締役 執行役員
都市開発事業本部 本部長

清水信彦
Nobuhiko SHIMIZU

受け継がれる地域コミュニティ
江戸時代、商家は祭りの間、商いを休み、博多の町は山笠一色に染まったという。現代でも、振興会の役員はほぼ通年で祭りに携わり、当番町（流を取り仕切る町で持ち回り制）や各流の幹部も数カ月は祭りの準備に費やす。
祭りに熱くなった人を「山笠のぼせ」と呼ぶが、この祭りが長きにわたって引き継がれてきた根幹には、単なる熱さだけではなく、秩序やしきたりがある。これについて豊田会長は、「事故を起こすと危ないので、自然と律して規則やしきたりを守るようになる。そのためには経験が必要となり、山笠では、経験を持つお年寄りが重んじられる。昇き山笠では、お年寄りが孫やひ孫の手を引いて、山笠の前後を走る姿もなじみ深い光景」だと語る。
地域の子どもたちは、昇き山笠の4分の3の大きさの子供山笠を昇くことで、山笠の昇き方だけではなく、その意義を理解していくのだという。祭りを通して、地域の大切なコミュニティが何代にもわたって受け継がれている。

さまざまな人の参加が長い継承に
どの地域でも伝統行事は大切に守られているが、それでも衰退してしまうケースもある。そうした中で博多祇園山笠が

時代の変遷を経て、隆盛を極め続けているのはなぜか。
その大きな理由として、「山笠はしきたりを守りながらも古いものに固執せず、その時代に即して変化してきた」からだ



1 9日のお汐井（しおい）とり。箱崎浜でお汐井をすくう。2 山笠の舁き棒にかける舁き縄づくり。3 飾り山笠の山笠台をつくる「棒締め」。4 足場を組み、飾り付けていく。5 平成3年第1回目の飾り山笠「三浦北條軍」。6 平成27年のソラリア飾り山笠。



と豊田会長は語る。

明治末期までは「舁き山笠」と「飾り山笠」は区別されておらず、十数mの高さの山を舁いていた。しかし街に電線が整備され、事故が相次いだことから、祭事存続のため、舁き山笠は高さ4.5mに規定し、元の高さの山笠は飾り山笠として残った歴史がある。

また、地域コミュニティに深く根差す伝統行事ではあるものの、他所の者を受け入れる度量があることも特筆すべき点だろう。博多以外のエリアに飾り山笠を建てていることに加え、各流に加わることも後見となる紹介者がいれば可能だという。

13日の集団山見せでは、福岡・博多の政財界で活躍する知名士や博多に貢献した人が舁き山笠に「台上がり」する。支店経済とも言われる福岡市は、首都圏に本社を置く大企業の社員も多く、その支店長などが台上がりすること多い。

「全国の祭りが衰退する理由の一つに後継者不足がある。長く継承するためには、自分たちだけの祭りにしてしまうのではなく、さまざまな人々が参加することが

必要だ」と豊田会長は語る。

この博多祇園山笠を筆頭とする「山・鉦・屋台行事」の全国33の祭事は、世界無形文化遺産候補としてユネスコに一括提案されている。

「西鉄は最大の協力企業の一つ」と豊田会長も語るように、西鉄はさまざまな取り組みを通じ、地域と一体となつて博多祇園山笠を盛り上げている。

都市開発事業本部長を務める清水信彦取締役・執行役員は「街の人々と一緒に祭りを盛り上げる中で、ビジネス上ではなく、一個人としてお付き合いをさせていただく。そうして育んできた地縁があるからこそ、まちづくりについても忌憚のない話し合いができるようになる。通常は利害が合わなかったり、競合したりということになるが、天神地区は皆が同じ方向を向いて、それぞれに邁進できる」と語る。

街が祭りを育て、祭りが街をつくっていく。そして、そこに人がいる。博多・祇園山笠の繁栄は、福岡・博多という地でそれが何代にもわたって続けられてきたことを映し出している。

平成27年度 ソラリア飾り山笠カレンダー

6月2日（火）
「棒洗い」神事

1年間保管されていた6本の舁き棒を、博多埠頭の北端にある櫛田神社浜宮で、博多湾の海水で洗い清める神事。

6月8日（月）
「小屋入り」神事

山笠台の部材や縄、さまざまな道具を並べ、安全を祈願する。櫛田神社の神職が祝詞を上げ、お祓いする。

6月24日（水）
「棒締め」

6本の舁き棒を山笠台に巻き付け固定する作業。山笠台は、くぎや金具を1本も使わずに麻縄だけで組み立てられる。

6月27日（土）～30日（火）
飾り付け

7月1日（水）
「御神入れ」神事

（ソラリアプラザ1階「ゼファ」）
飾り付けが終わった飾り山笠に神様を招き入れ、山笠を神の依代とする。櫛田神社の神職がお祓いする。

飾り山笠公開

山笠は、もう一つの人生

全国にその名をとどろかす博多の夏の祭礼、博多祇園山笠。「山笠があるけん、博多たい」——福岡市民が最も誇りとする伝統ある祭りである。子どもにとっての山笠、男衆にとっての山笠、女衆にとっての山笠。山笠は博多の人となりをつくるものでもある。故郷を愛し、山笠に毎年参加する長谷川法世さんにお話を伺った。

「博多町家」ふるさと館 館長

長谷川法世

Hosei HASEGAWA

権威におもねることなく花開いた祭り

博多祇園山笠は、博多の総鎮守櫛田神社の最大のお祭りです。その起源は諸説ありますが、仁治2（1241）年に承天禅寺の開祖・聖一国師が、博多の町に流行した疫病退散を祈祷し、若い衆に担がせた施餓鬼棚に乗って清めの水をまいたことに由来するというのが公式見聞となっています。

同じ祇園会でありながら、宮廷文化が反映された京都の雅な山鉦とは全く違いますね。博多祇園山笠には、荒々しさがあります。古代、集落中の男たちが一つの目的に向かって、わあーと叫びながら疾走していく。原初的な男の本能に訴えかける、野性と呼ばれるような、そんな祭りだと僕は思います。

また、それは地理的な要因もあって、日本最古の国際貿易港と言われる博多は、「海」の血が濃い。海民、海人です。気性の荒いところがあり、また中央から離れているので、権威におもねることなく、自分たちの好きなように祭りをつくっていくことができたんでしょう。山笠の行事の一つに、箱崎浜まで清めのお汐井（真砂）を取りに行く「お汐井とり」がありますが、これも博多人がもともと海の民であったことを物語る証左かも知れませんね。

山笠の人生はもう一つの人生

「のぼせもん」とは博多弁で、夢中になるという意味で、山笠に夢中になる人を「山笠のぼせ」と言います。いったん事が始まると、のぼせあがるわけですね。オフィスで、さっきまでスーツを着ていた同僚が、法被に着替えて抜け出して行ったなんていうのは、よく聞く話で、職替えする人も大勢いる。当番町になるとか、一番山笠が巡ってくるとかになったら、何年も前から気合いが入っていますから。

山笠は、博多町人の自治制度と厳しいしきたりを守ってきた男たちの祭りです。もう一つの人生、パラレルなんです、山笠の人生は。普通の人生は働いて食うのが人生だけれど、山笠の人生はどれだけ山笠につけたか、ちゃんと役割を果たすことができたか、あるいはどんな役をもらったか、役に就いたか——金にはならないし、手出しばかりだけれど、そこに人生がある。「流」によって、しきたりは異なりますが、山笠に貢献した人を偲び、慰

霊に昇き山笠を故人の自宅前に昇き入れる追善山笠というものもあります。山笠のぼせにとって、最高の名誉ですね。

女衆にとっても同じです。表には出なくても、炊き出しやら何やらの手伝いをし、男衆の留守を守る。女同士の連帯があり、町内の結束を育てます。

そして何より山笠は、子育ての場でもあるんです。赤ん坊の頃から父親に抱かれて、他の子どもが走っているのを見ると、子どもは早く自分も一緒に走りたいって思う。五つ、六つになると、子どもばかりのところにいられて、それが親離れ、親の子離れになります。年長の子もたちは、先頭を走る幼い子らを守る。幼い子は幼いなりに、集団の中での約束事を学びます。

小学校高学年になると流の名や町名を大書した幅一尺（約30cm）、長さ一間（約180cm）の「招き板」を掲げて、前走りをする大事な役目があります。沿道の観客の注目を集めて先頭を駆け誇る誇らしさ。山笠に貢献できる喜びや責任感が、子ども心にもしっかり刷り込まれるんですね。大人たちのかっこいい後ろ姿に憧れながら、世間の仕組みやしきたり、上下関係を学んでいく。そうやって一人前の男に成長していく。そんな仕組みが山笠にはあります。

時代とともに変わるもの、変わらないもの

高度経済成長期、全国的にお祭りが廃れていきました。お祭りにうつつをぬかすより、がんがんに働けば収入が上がる。そして町内に住んでいる人口も減ってきました。それに対応するやり方として、伝統には反するけれども、例えば他所から人を入れてやっていく。そういうノウハウを山笠全体で共有して、いろいろな問題をクリアしてきたので、山笠はどんなことがあっても乗り越えられると思います。

山笠のぼせは、生涯現役です。年を取っても締め込みができる限りは締め込みをして、その後は年寄り帷子を着て山笠のそばにいる。赤ん坊から年寄りまで、三世代、四世代と一緒に山笠を走らせる。山笠があって、人生がある。

しみじみ濃密な人のつながりがあるんだなあと思います。いいところに生まれたと思いますよ。

Profile

福岡市博多区生まれ。昭和43年漫画家デビュー。代表作に『博多っ子純情』『がんがらん』など多数。NHK朝の連続テレビ小説の原作となった『走らんか！』など小説・エッセイも多数ある。平成16年より九州造形短期大学客員教授。昭和55年博多町人文化勲章、平成18年福岡市文化賞、19年福岡県文化賞受賞。



新しい祭り

福岡・博多では、伝統行事のみならず、新たな祭りやイベントが次々に生まれ、成功を収めており、西鉄が基盤をつくったものも多い。新たな祭りによって生まれる新たな魅力で、街は一層多面性を持ち、さらなる飛躍を目指す。

各チームがオリジナルの踊りを競う

「ふくこいアジア祭り」

福岡・博多の三大祭りと言えば、「博多どんたく」、「博多祇園山笠」、そして9月に行われる「放生会」を指すが、祭り好きのこの地の人々は「秋から冬にかけての祭りが少ない」と声を揃える。

もちろん、それだけの理由からではないが、この十数年の間に、秋から冬にかけて開催される祭りやイベントが次々と生まれ、福岡・博多の新しい魅力を発信している。

毎年11月に行われる「ふくこいアジア祭り」は平成12年に始まった。高知を本場に全国に広がるよさこい祭りの流れを汲んだ祭りで、九州内外から約90チーム、約3000人が参加して、オリジナルの踊りを競う。

西鉄グループでは、若手の社員が中心となつて約50人の「西鉄よさこい連」を結成、毎年参加している。メンバーは祭りまでのほぼ3カ月半、就業後に週に1〜2度の練習を行うが、その努力が実つて昨年は93チーム中、6位入賞を果たした。

「去年は新入社員として参加して、仕事も慣れない中で練習するのは大変だった」



西日本鉄道株式会社「西鉄よさこい連」の皆さん（左から）
山石有紀美さん（総務広報部 広報課）
泉田幸徳さん（総務広報部 庶務課）
棕野雅大さん（都市開発事業本部 ビル事業部 開発リーシング課）
山口美波さん（SC事業部 ソラリアプラザ）

が、大人になってステージ上でスポットライトを浴びて、一丸となつて踊るのがとても楽しかった」と総務広報部の山石有紀美さんは振り返る。

SC事業部ソラリアプラザ担当の山口美波さんは長崎出身で、福岡・博多の人々について「お祭りに参加している人も見ている人も熱い人が多い。祭りに対してのエネルギーが大きいと思う」という感想を持つ。

事務局として携わる総務広報部庶務課の泉田幸徳さんは、参加する社員に対して「当社は熱い人間が本場に多い。皆で懸命に踊ってステージがうまくいったと

特集：祭りと地域コミュニティ

【西日本鉄道が育てる新しい「地縁」のかたち】

き、グループの社員として一緒に達成感を味わえるのが魅力」と語る。

リーダーの都市開発事業本部ビル事業部開発リーシング課の椋野雅大さんは「昨年、好成績を残せたことで西鉄よさこい連の存在が社内外に周知されるようになった。今年も皆がやる気に満ちて練習しているの、それを生かしたチームづくりをして、さらにいい結果を残したい」と意気込みを見せている。



1 冬の恒例イベントになったクリスマスイルミネーション。2 3 アジアンパーティの主要イベントの一つ「アジア太平洋フェスティバル」。4 街中に音楽があふれ出す九州最大級の音楽フェスティバル MUSIC CITY TENJIN。

アジアと創る「アジアンパーティ」

「福岡」からアジアの拠点都市「FUKUOKA」へ。9月から10月にかけては「アジアンパーティ」が開催されている。平成2年に始まった「アジアマンス」がより時代のニーズを捉えた総合イベントに昇華、「アジアと創る」をコンセプトに平成25年リニューアルされた。

「アジア太平洋フェスティバル」や「アジアフォーカス・福岡国際映画祭」、「福

岡アジア文化賞」、クリエイティブ・エンターテインメント都市・福岡をPRする「The Creators」などの主要事業のほか、関連イベントを実施し、アジアのヒト・モノ・情報が集う社交場をイメージして、文化交流や振興を図る。昨年は21のイベントに約46万人が参加し、その一つとして、ソラリアプラザでは、「TAIWAN EXCELLENCE」と題した台湾製品の体験イベントが行われた。

音楽があふれる「ミュージックシティ天神」

「MUSIC CITY TENJIN (FUKUOKA MUSIC MONTH)」は、西鉄にとって特にゆかりの深いイベントだ。天神の活性化と福岡の音楽的環境の向上を目的に、平成14年に西鉄の天神委員会が立ち上げた音楽祭だが、音楽都市・福岡ならではのイベントとして定着。現在では九州最大級の音楽イベントに成長した。

福岡市役所西側のふれあい広場をメインステージに、公園やソラリアプラザなど天神地区各所やキャナルシティ博多、博多駅などに特設ステージが設置され、プロ・アマ問わず多くのアーティストが出演する。期間中、福岡周辺でさまざまな音楽関連イベントが行われ、福岡市は糸島市と共同で9月の1カ月を「福岡ミュージックマンス」と命名している。

冬の祭りの創出「クリスマスイベント」

ところで、平成13年当時、設立間もなかった天神委員会が企画し、大成功を取

めたイベントがある。「天神のクリスマスへ行こう2001」で、その後は「We Love 天神協議会」に引き継がれ、天神地区のクリスマスシーズンのイルミネーションやイベントは、この季節の風物詩としてすっかり定着した。

クリスマスイベントは、JR博多駅周辺地区でも開催しており、これまで両エリアを統合したパンフレットの作成などを行ってきたが、中洲地区とともに連携して、広域のイベントとしてさらに発展させる構想がある。

「単発のイルミネーションはほかの地域でもやっているが、一緒に盛り上げて、広域の賑わいをつくりたい」と清水取締役は語る。

天神地区・中洲地区・博多駅地区は徒歩で約30分。イルミネーションやイベントを楽しみながら周遊すれば、福岡の冬の魅力を存分に楽しめるだろう。

「現在は福岡市近郊から訪れる人が多いが、連携して規模が大きくなることで、県外や国外からも人が集まるようになる。札幌の雪まつりのように、遠方からでも行きたいと思ってもらえる冬の祭りに育てていきたい」（清水取締役）

「地域の盛り上がりがどんどん広がっているし、今後さらに広がってもらいたいと思う」という言葉に象徴されるように、各地区で競争するのではなく、総参加と連携とともに盛り上げる。ともに楽しもうというオープンな気質、1年中祭りの熱気に満ちたこの街の勢いはとどまるどころを知らず、今後も発展を続けていくだろう。

特集：祭りと地域コミュニティ

[西日本鉄道が育てる新しい「地縁」のかたち]

アジアの交流拠点、
国際観光都市
FUKUOKAへ

長い歴史の中で培われた伝統・文化、近代的な都市としての魅力と美しい自然をあわせ持つ福岡。

福岡市を訪れる観光客数が、過去最高の記録を更新している。

特に外国人入国者数の伸びが大きく、福岡市では「国内外との交流による経済の活性化」を目指し、さらなる観光客増加に向けた取り組みを進めている。

文●香田朝子／撮影●三好邦次
写真提供●福岡市福岡市 経済観光文化局
観光産業課長

三宅宏治

Koji MIYAKE

世界一のおもてなし都市を目指す

——平成25年の観光統計によると、福岡市を訪れた観光客数は、過去最高の記録を更新しています。

三宅 平成25年の福岡市の入込観光客数は、対前年比2・4%増の1782万人で、2年連続で過去最高を更新しました。このうち宿泊客は、対前年比3%増の539万人となっています。

特に、外国人観光客数の伸びが大きく、福岡空港・博多港からの外国人入国者数は、平成25年が対前年比11%増の90万人、平成26年には120万人を記録しました。これは対前年比33%増に相当

します。円安の進行で、ほとんどの国・地域からの入国数が増えています。特に訪日意欲が回復した中国を筆頭に、韓国、香港、台湾、タイの伸びが大きく、クルーズ客船の寄港地上陸許可を含め、この5地域で27万人以上の増加となっています。

現在、人口減少社会にどう対応していくかが国の将来を左右する大きな問題として議論されています。福岡市は、今後20年間は人口増加が続く見込みですが、高齢者人口は確実に増加していき、高年齢者人口は確実に増加していき、将来にわたり、都市活力を維持していくためには、交流人口を増やし、地域経済の活性化につなげていく取り組みが必要です。

特に観光産業は、人々が移動し、食事や買い物など、さまざまな経済活動を伴うことから、福岡市民の約9割が従事する第3次産業を中心に、好影響を受ける産業の裾野は広く、福岡市全体に活力をもたらし、成長への原動力となります。

平成24年、福岡市は約25年ぶりに、延べ1万人以上の市民の皆さんと一緒にマスタープランを策定しました。その中で、都市経営の基本戦略を「都市の成長」と「生活の質の向上」の好循環を創出することとし、「人と環境と都市活力の調和がとれたアジアのリーダ都市」の実現を大きな目標として掲げています。そして、平成25年には、「福岡観光・集客戦略2013」を策定し、「世界No.1のおもてなし都市・福岡」の実現に向け、観光やMICE振興に力を入れています。

——観光振興については、どのような取り組みに力を入れていらっしゃいますか。

三宅 四つの力点を中心に、おもてなし観光都市・福岡の将来像を実現していきます。

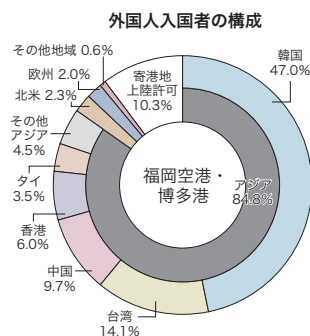
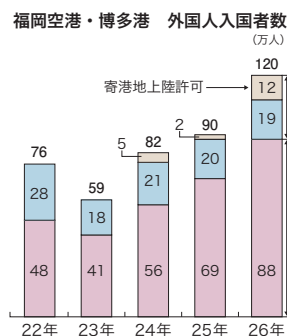
まず一つは「誘客」で、効果的なプロモーションの展開を進めています。特にインバウンドについては、福岡空港から直行便が就航しているアジアの有望市場

や欧州直行便が就航した欧州市場でのプロモーションにも注力しています。

外航クルーズ客船についても、港湾局がCIQ機能を持つクルーズセンターを整備するなど、受入体制を整え、誘致に力を入れています。博多港は、外航クルーズ客船の寄港回数が昨年は99回となり、全国一となりました。今年は予約も加えると280回以上と昨年の約3倍となる見込みです。

二つ目が「MICE」の振興です。福岡市は、日本政府観光局（JNTO）の国際会議統計では、東京に次いで5年連続2位となっています。コンベンションのお客さまは消費単価が高く、大きな経済波及効果があります。また海外の訪問客から「福岡はよかった」という評価をいただければ、「フクオカ」の名前を世界に広めることにもつながります。

国際MICEを誘致して、福岡市のブランド力を上げる。川端商店街や福岡城を会場にレセプションを開催したり、国家戦略特区による道路占用許可基準の緩和を活用して公道上で学会の懇親会を開催するなど、ユニークベニューの拡充にも取り組んでおり、官民一体となって、戦略的なMICE誘致や開催支援の強化



※1 CIQ

※2 MICE

※3 ユニークベニュー

税関 (Customs)、出入国管理 (Immigration)、検疫 (Quarantine) の頭文字。出入国の際に必要な三つの手続きの略称。

会議 (Meeting)、報奨・研修旅行 (Incentive Travel)、国際会議 (Convention)、展示・見本市、イベント (Exhibition/Event) の頭文字。

公園、美術館・博物館、商店街や歴史的建造物、史跡などを活用して MICE のウェルカムパーティーや市民交流をすること。



来福客に人気の FUKUOKA OPEN TOP BUS

を進めています。

そして、三つ目が「魅力づくり」です。シヨッピングやグルメなど、すでに高く評価いただいている都市型観光の魅力をしっかりと磨き上げていく。博多湾など、海に開かれたまち・福岡の個性を活かした魅力づくりも同様に進めています。

また、福岡には数多くの歴史的資源があります。これまで観光にうまく活かしきれないところがありました。そこで、復元計画が進められている福岡城跡内に福岡城の歴史を模型や古地図で紹介する「福岡城むかし探訪館」を開設しました。また、AR技術を活用したデジタル回遊ツアー「鴻臚館・福岡城バーチャル時空散歩」を実施しています。これは、タブレット端末を使って、CGで再現した当時の福岡城や鴻臚館の姿を見ながら観光するもので、黒田官兵衛・長政父子が過ごした城内の様子や、彼らが

眺めたであろうかつての福岡の街並みなどを楽しむことができます。

最後の四つ目が「観光の産業化」で、福岡観光の多数を占める日帰り客を宿泊観光にチェンジしていく。消費単価増を目指す、「もう一泊、もう一品、もう一楽しみ」の取り組みを進めています。

この四つを力点に取り組みを進め、平成34年には入込観光客数2000万人を達成することを目標としています。

来福客に喜ばれる、お祭り好き気質、

——「祭り観光」も福岡の大きな魅力です。

三宅 祭りは、多くの来福客を集める重要な観光・文化資源です。福岡市は現代的な都市ですが、歴史的・文化的な祭りや史跡を大切に受け継いでいます。5月の「博多どんたく港まつり」、7月の「博多祇園山笠」、9月の筥崎宮の「放生会」の博多三大祭りのほかにも、歴史ある祭りが数多くあります。

また、平成12年に天神地区の商店主が有志となって始めた祭りが、市民や地域の支援を得て3000人規模の参加人数を集めるまでになった「ふくこいアジア祭り」や、「アジアと創る」をテーマに



福岡城には天守閣がなかったというのが通説だが、福岡城バーチャル時空散歩では、映像で「想像の天守閣の姿」を楽しむことができる。下図は天守閣からの江戸時代の眺望。

若い世代に向けてさまざまなイベントを展開する「アジアンパーティ」、他にも「ミュージックマンス」や「中洲まつり」など、1年を通じて多彩な祭りがあり、多くの観光客を集めています。

こうした祭りやイベントを、来福客も市民と一緒に楽しむ、まち全体が盛り上がる福岡ブランドとして、盛り立てていきたいと考えています。

大陸文化の窓口として、交流の歴史の中で発展してきた福岡には、訪れる人を喜んでおもてなしする開放的な気質が今でも息づいています。皆で楽しもうという「お祭り好き」気質は、まさにそんなおもてなしの心に通じるもので、福岡市を訪れる人たちからは、他都市にはない魅力だと喜んでいただいています。

——観光都市・福岡の実現に向けて、市民や民間事業者には、どのようなことを期待されていますか。

三宅 市民・民間・行政がそれぞれの立場や役割を認識し、積極的に連携しながら観光やMICEの推進を図っていき

いと考えています。市の外郭団体である福岡観光コンベンションビューローが総合ディレクターとして取り組みを進め、事業者や施設の皆さんは最前線のおもてなしの主体として活動する。市はまとめ役、サポート役として施策を企画・立案、観光の視点に立って関連施設の整備やまちづくりを進めていきます。そして市民の皆さんには、福岡の良さを誇りに、おもてなしの心を持って来福客との交流を図っていただきたいと思います。

福岡市では、観光都市のシンボルとして、平成24年から2階建てオープントップバスを使用した市内観光3ルートの循環バス路線「FUKUOKA OPEN TOP BUS」を西日本鉄道が運行しており、将来的には天神地区・JR博多駅周辺とウオーターフロントの3拠点を結ぶ「都心循環BRT」も計画されています。

また、市民の皆さんに「福岡通」となってもらい、福岡の魅力発信の担い手として活躍していただこうと、「福岡検定」も実施しています。

古来より、この福岡の成長エンジンは「交流」でした。今でも、人が集い、交流すること、都市の活力が生まれています。今、福岡市を次のステージへと押し上げる「FUKUOKA NEXT」を推進しています。アジアのリーダー都市を目指し、市民の皆さん、民間事業者の皆さんとともに、観光・MICEの分野でもさまざまなチャレンジを行い、福岡市を次のステージへと飛躍させていきたいと思っています。

一般社団法人 日本民営鉄道協会 第99回 定時総会を開催

日本民営鉄道協会では、平成 27 年 5 月 29 日（金）に東京都千代田区の経団連会館において
第 99 回定時総会を開催、総会決議を採択するとともに、役員を選出しました。



第 99 回定時総会では、平成 26 年度の事業報告及び収支決算、
平成 27 年度の会費について承認した後、総会決議を審議し、採択しました。
また、役員の選任では、新会長に根津嘉澄東武鉄道株式会社取締役社長を選任しました。

新役員				決議項目
会 長	根 津 嘉 澄	東武鉄道(株)	取締役社長(新任)	1. 国及び地方公共団体に対するお願い (1) 安全・安心対策、利便性・快適性など輸送サービスの向上対策、省力化・低炭素化対策、地方民営鉄道の再生・活性化対策等に係る公的支援の拡充・強化 (2) 観光振興及び2020年オリンピック・パラリンピック東京大会開催に向けた総合的支援 2. 国に対するお願い 民営鉄道の安全で安定的な運行に支障が生じることがないように、安定的かつ低廉な電力供給の確保
副会長	山 木 利 満	小田急電鉄(株)	取締役社長(新任)	
〃	山 本 亜 土	名古屋鉄道(株)	取締役社長(再任)	
〃	加 藤 好 文	京阪電気鉄道(株)	取締役社長(新任)	
〃	大 谷 隆 男	秩父鉄道(株)	取締役社長(新任)	
〃	杉 山 健 博	神戸電鉄(株)	取締役社長(新任)	
〃	佐 伯 要	伊予鉄道(株)	取締役社長(再任)	
(役職については5月29日現在)				



一般社団法人 日本民営鉄道協会 会長

ね づ よし ずみ
根津 嘉澄

(東武鉄道株式会社 取締役社長)

鉄道に期待される 公共的使命の重さを自覚し、 より安全で安心な、 快適で利便性の高い、 民営鉄道を目指す

このたび、日本民営鉄道協会の会長に就任いたしました東武鉄道の根津でございます。

これからの二年間、会員各社とともに、民営鉄道事業を取り巻く諸課題に積極的に取り組み、鉄道のもつ公共的な使命を果たすべく協会運営にあたっております。

まず、安全の確保は輸送事業者にとって最大の使命と認識しております。協会として、常日頃から、会員各社間で情報の共有を図るとともに、機会あるごとに安全確保に向けた取り組みについて相互に確認し合ってきたところであります。今後とも、各種委員会等における諸活動を通じ、日々の運行の安全はもとより、大規模災害対策や危機管理対応も含め、安全・安心への取り組みを一層強化してまいりたいと思います。

その上で、快適で利便性の高い輸送サービスを将来にわたって安定的に提供できるよう、会員各社の取り組みを基本としつつも、協会として、利便増進事業やバリアフリー対策、安全対策、地方鉄道活性化対策など各般にわたる施策の推進のため、国等の施策と連携を図り、所要の予算の確保や税制改正要望等に関係方面に働き掛けていくことにより、業界全体の輸送サービスのさらなる改善に取り組んでまいります。

当面の課題として、2020年のオリンピック・パラリンピック東京大会の成功に向けた

取り組みや増大を続けるインバウンドへの対応があげられると思います。

具体的には、大会に向けて、円滑な輸送の確保や多言語対応を進めていくほか、交通系ICカードの利用拡大や無料公衆無線LAN(Wi-Fi)整備の動きに呼応して、訪日外国人にとって安心で快適な鉄道利用環境の整備を図っております。

わが国経済は、安定した政権運営とアベノミクス効果により回復基調が続いており、民営鉄道を巡る輸送動向は、概ね堅調に推移しております。

しかし一方で、人口減少や急速に進む高齢化、過疎化の進行、不透明なエネルギー情勢など業界を取り巻く環境には引き続き厳しいものがあります。

そのような中で、重責を担うことになり、身の引き締まる思いであります。鉄道に期待される公共的使命の重さを自覚し、より安全で安心な、快適で利便性の高い、そして今まで以上に「ひとと環境に優しい」民営鉄道を目指し、会員各社はじめ、関係者の一層のご理解とご協力のもと、さまざまな課題に緊張感とスピード感をもって取り組んでまいります。

皆様方には、私どものこのような取り組みに対し、引き続きこれまでと変わらぬご理解、ご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。就任のご挨拶とさせていただきます。

(定時総会後の記者会見より)

地方 民鉄 紀行

長野電鉄株式会社



善光寺に小布施、
沿線の人気観光名所には、
強い日差しを
ものともしない観光客の
笑顔が集う。

長野電鉄の沿線散策で、「どこへ行こう?」なんて迷うことはない。そこには善光寺がある。長野といえば、何はともあれ善光寺。牛に引かれて善光寺参りならぬ、長野電鉄に乗って善光寺参りへ。

地下から始まる長野電鉄

長野駅から善光寺への最寄り駅である善光寺下駅まで、長野電鉄は地下を走る。5分弱の地下移動の後、下車した善光寺下駅は、等間隔に並ぶ柱に蛍光灯。古い時代の映画のセットに紛れ込んだような、ちょっと不思議な雰囲気。

トンネルに消えていく電車を見送っていると、広々としたホームにぼつと一人、取り残される。風の抜ける音しかない静けさに我に返って足早に向かった改札口周辺も、乗降客がすっかり消えて静まり返る。駅務室の奥に引つ込む寸前だった駅員さんに声を掛け、フリー乗車券を示して改札を出る。

階段を上り地上へ向かうと、次第に空気が重く、熱くなってくる。踏み出した地上の世界は、強い日差しにアスファルトが溶けるような炎天下。善光寺下駅から善光寺までは徒歩約10分。影踏みでもするように、日陰を選んで歩いていても、一歩踏み出すごとに汗がにじむ。地下のせいか、空調のせいか、全体的にひんやりとした空気に包まれていた駅が恋しい。

こんな炎天下なら、善光寺もすいているに違いない?……そんなことはあり得ない。

暑さに負けず善光寺参り

長野県屈指の観光名所、善光寺の人気を甘く見てはいけけない。休日の善光寺参道は、30℃を超える気温をものともせず参拝に来た善男善女が笑いさざめく。

暑い暑いというなだれ気味に歩いてきたにもかかわらず、参道の賑やかさを目にした途端、気分が浮き立つ。仲見世を冷やかし、大きな山門をくぐり、本堂へ。薄暗い本堂の中は、参拝客で大賑わいにもかかわらず、何故か涼やか、さすがは聖域。ご本尊様と結縁ができるというお戒壇巡りは大人気で、どうやら順番待ちになりそうなので、お参りだけ済ませて、ひとまず本堂を出る。

境内では、6月から11月の毎月第2土曜日に、「手づくり」をコンセプトとした「善光寺びんずる市」が開催されている。そして本日は、運よく第2土曜日。本堂左手の庭園木々の間を縫う小道に市が立っている。

手づくりのアクセサリーや木製のおもちゃ、焼き菓子や果物を売る小さなテントをのぞいたり、お抹茶を飲んで一息ついたり。数百円から数千円程度の品物を扱うお店が並び、中、十数万円と値のついたお琴を並べたお店を見つけてびっくりしたり。

まだまだ日は高いのに、木陰のせいか本堂の中と同じくらいに涼しくて、そろそろ歩きに時間を忘れ、気付けば小一時間が経過。そろそろ次の目的地、小布施に向かおうと境内を出た途端、暑さ再開。逃げるように、駅に戻る。



善光寺は大賑わい。びんずる市も開催中

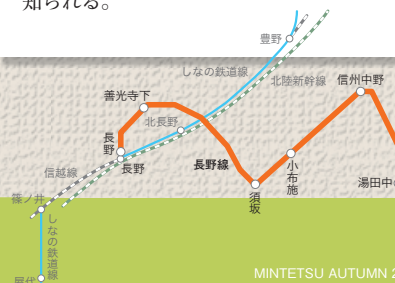


乗降客が消えた善光寺下駅のホーム。トンネルを抜ける風の音しか聞こえなくなる

長野電鉄

【ながのてつどう】

長野駅から湯田中駅まで、全24駅を各駅停車で約1時間、特急では約40分で行く。沿線には善光寺や小布施などの観光名所を抱え、「ながでん」の愛称で知られる。





北斎館では北斎の肉筆画が見られる



小布施の町は栗一色

栗の町への期待が高まる

小布施駅までは善光寺下駅から約30分。善光寺下を発車すると、電車は間もなく地下から地上に出てきて、車窓の景色が楽しめるようになる。

日差しが差し込み明るくなった車内を見れば、ガイドブックを指差しながら何やら相談している親子連れや外国人観光客などで、8割以上の席が埋まっている。聞こえてくる楽しい会話の中には「栗」という単語がちらホラ。栗といえば小布施、小布施といえば栗。どっやら皆さんも小布施を目指しているらしい。

「〇〇の栗手羹が……。〇〇の栗のどら焼きが……。モンブランが……。漏れ聞こえてくるグルメ情報に耳をそばだて、「それじゃあ、私もそれを買おうかな」などと考えるうちに、小布施駅に到着。

駅舎は全体的にこげ茶色で栗のイメージ。ホームの柱に付けられた駅番号を示す表示こそ、他の駅と同じ、りんごの形をしているけれど、駅に付設する観光案内所と喫茶室の案内版には、こげ茶色の栗のマーク。栗商品を扱う老舗が集中する、小布施観光の中心地に歩いて歩き出すと、道路に立つ標識や街灯、銀行の建物まで、同じようなこげ茶色で統一されている。景観を考えて採用された色調なのかもしれないけれど、小布施の町でこげ茶色といえば、連想されるのはやっぱり栗。町全体が栗色で、「栗の町」への期待が高まる。

栗の町は北斎の町

瓦屋根に土壁の堂々とした店構えの老舗に、甘い匂いを漂わせている小さな間口の気軽なお店。栗栗栗……。と期待してきた観光客を裏切らない多彩なお店が、景観と風情を保つ絶妙なバランスで寄り合う。

とはいえ、小布施は栗だけの町ではない。かの有名な浮世絵師・葛飾北斎が晩年、地元の名士・高井鴻山に招かれて逗留していた「北斎の町」でもあるというところで、老舗が連なる中心地の一角には、北斎の肉筆画などを展示する美術館「北斎館」がある。

開催中の特別展をのぞくと、北斎をはじめ、喜多川歌麿や歌川豊国などの作品がずらり。芸妓などを描いた美人画は、同じ構成の絵なのに印象がまったく違ったり、描かれる女性の髪形がさまざまだったり。一見、似通って見えるものも、ゆっくり見比べると違いが見えて、なかなか楽しい。父親の解説を聞く小学生くらいの男の子が、「顔がみんな一緒だ」と素直な感想を述べているのも、また面白い。美術館を出ると、長い夏の日も傾きつつある。そろそろ最後の栗菓子選び。電車内で小耳に挟んだ情報を基に物色。お菓子選びに悩むと同類か、見たような顔とあちらこちらの店で行き合い、あいまいな笑顔を交わす。あんまり何度もすれ違つのはばつが悪い。さっさと決めてしまおうとは思いつけれども、選びきれない。

仕方ない、気になるものを少しずつ、この際、全部買って帰ろう。



小布施駅には特急車両「2000系D編成」が保存されている



たくさんの観光客が小布施の街を訪れる



今年の栗はまだ緑

吉田初三郎の世界

長崎市の
美しい鳥瞰図

博覽會を前に
立派に出來上る

障のような歴史の前、長崎
 の街を一路のうちに覆まれ
 るとても美しい海軍国に完
 成した。長崎市ではこの海
 軍をなくでやつて来るが、
 地獄が海軍の艦、長崎を

紹介するために所望の艦
 者吉田初三郎氏に奉刺し
 来上つたのがこの美しい
 艦員で八日すでに長崎
 司令部の機関も終つた

(大阪毎日新聞／昭和9年2月9日)

景勝の長崎

長崎市鳥瞰図

文・藤本一美

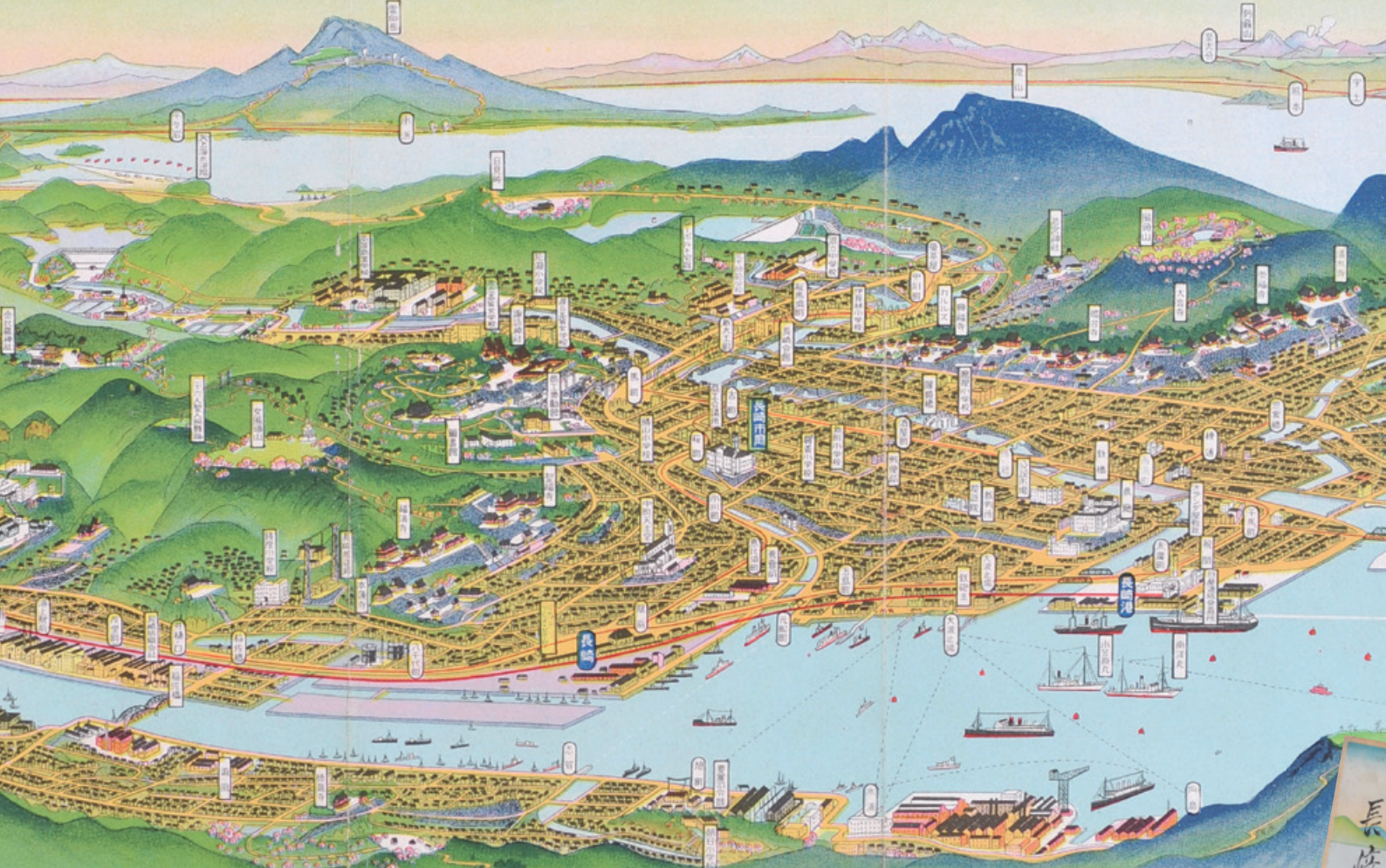
text by Kazumi FUJIMOTO

異国情緒溢れる長崎の街並みとその周辺が、吉田初三郎鳥瞰図絵作品になったのは、昭和九年（原画は昭和八年）一月のことである。当時の大阪毎日新聞二月九日号によると、博覧会開催を前に初三郎に依頼したという。これは長崎市主催の国際産業観光博覧会（同年三月二十五日～五月二十三日開催）のことで、市の予算は五十万円。市内中ノ島、浦上川河口の埋立地が第一会場、第二会場が雲仙になったのは、国立公園に選定されたのを契機に、市中から雲仙への遊覧構想の願いを実現したかったからに他ならない。

鉄道交通手段の長崎本線や市中进行する長崎電気軌道の路面電車が縦横に図示されているのはそのためであろう。路面電車会社の創立は大正三（一九一四）年八月二日。谷戸の市中東西に延びる大橋―思案橋間の本線、南北の桜町支線、蛸茶屋支線が図示。戦後の高度成長期には赤坂（あか）道や正覚寺下まで延伸している。

藤本一美

首都大学東京・専修大学非常勤講師。地図情報センター理事。日本地図学会評議員。鳥瞰図・展望図資料室兼山岳情報資料室主宰。近・現代の鳥瞰図絵師の作品収集と研究に精力的に取り組んでいる。著書に『旅と風景と地図の科学Ⅱ』（私家版 2006 年）、最新刊に『展望の山 50 選 関東編』（東京新聞出版局）がある。



『景勝の長崎 [長崎市鳥瞰図]』

(昭和9 (1934) 年1月25日)

長崎市観光誘致協会 発行

京都市内の観光社出版部 印刷

長崎市内の移動を支える`市民の足、`観光の足、 歴史ある街を走るレトロ&モダンな路面電車



長崎電気軌道株式会社

Nagasaki Electric Tramway Co., Ltd.

創立：大正3 (1914) 年8月2日

営業開始：大正4 (1915) 年11月16日

本社：長崎市大橋町4番5号

長崎電気軌道は、大正4 (1915) 年の病院下電停ー築町電停間3.7kmの開通に始まる路面電車。原爆投下、長崎大水害などの苦難を乗り越え、現在では総延長11.5km、四つの主要系統とその他の一つの系統で1日当たり平日1122本、休日1064本の電車を運行しています。

また、明治44 (1911) 年生まれの168号から、最新の超低床式路面電車5000形まで、22種類75両にもなる車両が運行。レトロ&モダンな路面電車が市内観光の目玉の一つとなっています。

平和公園や原爆資料館、大浦天主堂、グラバー邸など、長崎の主な観光名所は、ほぼすべて沿線に点在しており、観光客の多くは路面電車に乗って長崎観光を楽しんでいます。



「地図遺産」ともなるであろう。

まさに初三郎は戦前の生き証人、

そして、昭和二十年八月九日、原爆投下被災地となり、悲しみと苦しみ、歴史を背負いながら復興を遂げてきた。私は修学旅行で生徒たちを引率し、歴史と観光に生きる姿を学んだことも。出島オランダ屋敷跡や眼鏡橋、グラバー園、シーボルト宅地跡、浦上天主堂、爆心地などを訪れたことを思い出す。

そんな長崎が、昭和二十年八月九日、原爆投下被災地となり、悲しみと苦しみ、歴史を背負いながら復興を遂げてきた。私は修学旅行で生徒たちを引率し、歴史と観光に生きる姿を学んだことも。出島オランダ屋敷跡や眼鏡橋、グラバー園、シーボルト宅地跡、浦上天主堂、爆心地などを訪れたことを思い出す。

大胆な構図は、稲佐山 (三三三m) 上空から眼下の長崎市街を中央に大きく描写。背後に雲仙岳と阿蘇山カルデラを配置。両端遠景には、いつものことだが、中国大陸の上海・大連や東京、富士山まで入れている特異性が楽しめる。

リアス式海岸 (近年はリアス海岸) の湾内には、数多くの船舶が浮かぶ国際観光都市でもあることがわかる。



博多祇園山笠 十三番山笠 ソラリア
「御神入れ」(飾り付けを終えた飾り山笠に神を招き入れる神事)

みんな てつ Vol.55 | AUTUMN 2015 秋号

●発行所／一般社団法人 日本民営鉄道協会

〒100-8171 東京都千代田区大手町2丁目6番地1号

TEL: 03-5202-1402 FAX: 03-5202-1412

URL: <http://www.mintetsu.or.jp>

●発行人／一般社団法人 日本民営鉄道協会広報委員会

●企画編集／一般社団法人 日本民営鉄道協会広報部会 (東武鉄道、西武鉄道、京成電鉄、京王電鉄、小田急電鉄、東京急行電鉄、京浜急行電鉄、東京地下鉄、相模鉄道、名古屋鉄道、近畿日本鉄道、南海電気鉄道、京阪電気鉄道、阪急電鉄、阪神電気鉄道、西日本鉄道)

●企画編集協力／時事通信出版局「みんなてつ」編集室

●写真／三好邦次

●アートディレクション・デザイン／浜田修司／太島恵里子

●印刷／大日本印刷株式会社

※本誌の記事、写真、イラストレーション、ロゴの無断転載を禁じます。